

---

# 鋼鉄の指揮官（ハガネノシキカン）

黒縁眼鏡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鋼鉄の指揮官ハガネノシキカン

### 【Zコード】

Z4762Z

### 【作者名】

黒縁眼鏡

### 【あらすじ】

若くしてとある空軍基地に司令として派遣された男のストーリー。SFロボットアクション物の定番であるパイロットが主人公では無く、指揮官として戦略・戦術を駆使して敵との戦闘を繰り広げていく。

エースパイロットでも無い彼を英雄と呼ぶ物はいないだろう。

彼より輝かしい功績を残した者は多くいる。

ただ、彼がいなければその功績は無かったかも知れない。

部隊の裏役者として戦っていく彼の知謀を楽しんでください。

## 登場人物（前書き）

登場キャラの簡単な紹介です。

## 登場人物

### 登場人物

坂本竜 サカモト リュウ：階級大佐・年齢28

世界初の大型兵器マップス試験用特殊部隊出身。初期マップス適合者の中に士官学校出が彼一人だったため、異例の若さで基地指令に赴任する。

田口修造 タケチ シュウゾウ：階級軍曹・年齢25

第一世代型マップスの元テストパイロット。現役パイロットを続けながら教官としてパイロット候補生の指導にあたっている。

整備のオヤジ：整備主任・年齢43

主人公のパイロット時代から整備を担当していた。ガレージのカリスマ

ガンドック小隊：近接攻撃と連携が得意な若い正規パイロットの集まつた小隊。部隊内はいつも騒がしい。

ガンドック1：犬塚剣 イヌヅカ ケン：階級中尉・年齢25

ガンドック小隊の隊長。騒がしい部隊を上手くまとめている。

ガンドック2：吉田理恵 ヨシタ リエ：階級：少尉・年齢22

ガンドック小隊の副隊長。少し小言が多く理屈っぽい。同じ部隊の高井則良とはライバル関係。

ガンドック3：小山静 コヤマ シズカ：階級准尉・年齢20

いつも無表情で声に抑揚が少ないと言われている。

ガンドック4：高井則良 タカイ ノリヨシ：階級准尉・年齢20

お調子者だが、戦闘中の命令にはしっかりと従う。吉田との勝負は負けが多い。

ガンドック5：石山慎治 イシヤマ シンジ：階級准尉・年齢20

冷静なスナイパー。冷静過ぎて気付かぬこともあるとか。

徳川大佐：オーカシス陸軍基地司令官・年齢49

ほりの深い渋いダンディーなオジサマ。軍による首都警備の第一人者

毛利大佐：カシゴマ海軍基地司令官・年齢50

老狐と称される強面なオジサマ。首都警備の応援に参加する。

宮野茂：ミヤノシゲルヤポネ軍空軍大将・年齢60

坂本大佐のパイロット時代からの上官。眼鏡のおかげで極めて真面目に見える方だが、かなりの破天荒オヤジ。定年は65なのだが、特別顧問として残るつもりでいるらしい。

陸軍大将と海軍大将：年齢59と58

警備について確認をとるために空軍大将の宮野とともに打ち合わせ参加。空軍大将と合わせて軍の三大トップ。三人の仲は結構良い。

警察庁長官・年齢56

国際会議中は建築物、市民、首脳と守るものが多くて苦労する警察トップ。毎回警備が大変なので、そろそろ胃潰瘍にでもなるのではないかと心配中。

澄川早苗：スミカワサナエ中央司令部情報解析部に所属・年齢26

坂本のパイロット時代の同僚。音にとても敏感で声の調子で人の感情を予測することが出来る。

## 序章・「コーヒー&amp;ワールド」ユース

「序章「コーヒー &amp; ワールド」ユース」

「本部、こちらゴースト1。作戦通り敵戦車部隊を撃破する」  
本部に作戦行動を開始することを伝える。

「こちら本部。了解した。新型の実力見せてみろ」

「ゴースト1。こちらオペレーターの澄川スミカワです。情報のバックアップは任せください」

「了解。ミッション（フェアリー・フロム・ファンタジー）スター  
ト」

フェアリー、妖精という可愛らしい名前がついている作戦名だが、  
敵にとってはそのような生やさしいものではない。

わずか数分で戦車小隊を撃破したと思ったら、他に展開している部  
隊が撃破されている。

敵指揮官にとっては悪夢にしか思えない光景が広がる。

撃破される直前の通信により謎の新兵器による攻撃が来ることは分  
かっているが、いったい何に攻撃されているか全く分からない。

「敵さんかなり混乱してるんじゃないかな？」

ゴースト2が楽しそうに通信を入れる。

「フフ、ボクの自慢の娘だよ？ これくらい出来て当たり前だね」  
ゴースト5が興奮気味に機体について応答を返す。

「ああ、本当にこれは凄いな。戦車とか戦闘ヘリとか比にならない  
くらい使いやすいぜ」

作戦に参加している仲間が全員感嘆の声をあげている。

そして私もこの数分の間で、機体のすごさを実感している。

士官学校出たての新尉官が歴戦の敵部隊を次々に撃破していく。

10機による一中隊で敵一大隊を全滅させた。

こんなあり得ない戦果が、私が最初にあげた功績だった。

おどき話やゲームからやつてきた幻の存在。

誰もが子供の頃に憧れた作り物。

人型兵器コードネーム・ゴースト

敵がこちりにつけたコードネームも、その名の通り（ゴースト）だった。

## 辞令

新型兵器実戦試験用特殊部隊「ゴースト」

部隊長坂本竜中尉

貴官を来月付けでヤポネ国キーナ空軍基地司令官として任命する。それに対し階級を大佐に昇進とする。

この辞令から私の生活は一変する。

軍上層部から辞令を受け取るまで、私は20歳から26歳までパイロットとして国境付近や紛争地域での介入など各地を転戦してきたが、今はヤポネ南方キーナ空軍基地司令官として転属して2年が過ぎた。

この2年でようやくパイロットではなく、管理者としての仕事にも慣れてきた。

顔を洗い、身なりをただす。鏡に映るのは身長170cmで筋肉質のしまった身体をしている男性。髪は剃つてあり、髪型は清潔感のある短髪で、眼はどちらかといつと垂れ目だ。実年齢より若く見られることがそこにある。正直司令官としての威厳ある顔とはかけ離れていると思つ。

軽く朝食を済ませ、コーヒー片手に端末を立ち上げる。おはようございます。と機械音声が流れ、カレンダーに記録されたスケジュールのチェックから始まる。

「さて、今日の仕事は」

・パイロット候補生の模擬戦0900

・国境資源会議警備の打ち合わせ1400

・各種基地報告書の作成。

「ふむ、また国境資源会議か。今度のでもう五回目になるな」

軍人が政治や外交に口出しをするのは厳禁なのだが、1ヤポネの国民としても大変気になる問題だ。10年前、ヤポネ発の新エネルギー－革命の核となつた技術。物質の持つ全てのエネルギーを自由自在に変換させるエネルギー自由変換粒子通称「FTE（Free Transfer Energy）粒子」の発見。そして粒子生産機器に必要な特殊金属「FTE鉱石」の発見。

これは人類にとって最大の発見であり、化石燃料に頼りきつたエネルギー政策は全て過去の物となつた。

しかし、これほどまでに世界を変えた資源の分布が極端に偏つていたのが、今この時にも続いている問題の原因となつた。

ヤポネに大部分の鉱脈が存在しているのだが、その内の一つがよりもよつて、高い軍事力を持つ大国レトリア連邦に隣接している。「北の国境警備の連中はさぞかし頭が痛いだろうな」

北の基地の方が設備や待遇が良いのは士気を保つのと、威嚇による抑止力政策なのだろう。ただ、いつ砲撃が来るかも分からぬ所で大勢いる隊員の命を預かる気苦労は想像もつかない。そんなところに派遣されなくて良かつた。

「こちらから攻めに行くわけにはいかないしな。一体いつこの騒ぎが収まるのやら」

ため息を一つしてから「コースサイトを立ち上げる。トップニュー  
スはやはり会議についてで、世間的にも大きな関心事になつてゐる  
ようだ。ヤポネは鉱脈の発見により資源輸入国から一気に資源産出  
国に変化し、国の経済は大変潤つた。それも、單なる資源輸出では  
なく、粒子制御に関わる数々の特許や機器そしてインフラ整備とい  
う形での輸出を国として支援、その結果価格設定などの面で非常に  
強い力を持ち世界経済の中で大きな力を得た。

この裏には政治的介入でFTT-E関連の研究を世界に公表させず、技術の確立と鉱脈の確保が出来てから電撃発表したため、完全に技術レースで独走状態となつたのがその原因の一つ。

また、エネルギー変換効率の大幅増加による生産コストの削減、膨大な電力を消費して、農業における高度機械化による生産の安定化、住宅環境の改善など企業や個人の生活に大きな変化をもたらした。それだけに国民の関心は高く、政府側も一度上がつた経済レベルを下げるに繋がる採掘権の一部譲渡や領土の割譲は選挙のために出来るはずが無かつた。

そのため、これまでの会議では一歩も譲らず、レトリア連邦との議論は平行線に終わつていた。

そんな現状で会議を催す理由としては、この数年で軍事演習と称して時折国境付近にレトリア軍が展開することがあり、実際に何度も戦闘があつた。

そして、本格的な軍事衝突を阻止するために二年前から催された会議なのだが、未だに会議の前後で軍を展開されるので、我々軍人も会議前後の期間は非常に緊張する。

「そもそもレトリア連邦の方には鉱脈が1kmも続いていない上に、大した埋蔵量もない状況で、レトリア連邦の国家的財産であるFTT-E資源をヤポネに侵害されている。という主張はふざけているのだが。新エネルギー革命以降のことを考えれば、この暴論を持ち出す理由も分からなくも無いのだが迷惑な話だ」

レトリア連邦はもともと化石燃料の產出国として、化石燃料とそれに付随する工業商品が産業の割合として高かつた国だつたのだ。

しかし、FTT-E技術の普及により大きな経済的ダメージを受けて、財政が次第に悪化していった結果、このような主張をするようになつたと分析されている。

「色々と変わつたからな。何か明るいニュースはあるかな？」

残りのトピックも時間が許す限り確認していった。特に大きな事件もないようで、経済では首都と郊外の地価が連續で上昇中とか、企

業の新製品発表だと景気の良い話が掲載されていて、芸能やスポーツ関係の記事も多く掲載されている。今日も当たり前の平和が続いているようだ。

芸能人の「ゴシップ」話で「メント欄」が盛り上がるのは国民に余裕のある証拠だろう。

「さてと、パイロット候補生の模擬線はまずガレージだったな」「空いたコーヒーカップを洗い、乾燥棚において個室を後にする。

## 第一章「機械の身体」

### 第一章「機械の身体」

将校用の個室からガレージに向かう途中教官を務める田口軍曹を見つけた。身長は185cmと高く、黒い髪のショートモヒカンがあるせいで、もう少し高く見える。田に焼けた黒い肌と服越しにも分かる筋肉をしている彼はなかなかの威圧感がある。

こちらに気付くと敬礼とともに威勢の良い挨拶をしてきた。

「おはようございます大佐殿。お早いですね」

この少しあがれた声が怒鳴り声になるとたちまち訓練名物の鬼軍曹怒りの怒号となる。場合によつては怒りと愛の鉄拳付きだ。

「おはよう田口軍曹。今年のルーキー達は使えそうか?」

「肯定です大佐殿。皆輝く物を持っています。それぞれの特性にあつた配備をすれば悪くない戦力となるでしょ?」

「なるほど。君がそういうなら今日の模擬戦が楽しみだな。」

この日の訓練は正式に配備されている小隊との模擬戦である。1対1の戦闘ではなく、基地防衛側と攻略側に分かれての実戦形式で戦闘を行う形式だ。

ちなみにこの基地では毎回こうした模擬戦で賭けが行われている。偉い人は怒りそつだが、戦闘の条件から勝利する方を選ぶのは戦術と戦略を学ぶ良い教材となるのだ。

教育にはムチと飴がなくてはならない。そのムチと飴にあたるのが賭けの結果ということだ。ちなみに模擬戦参加者にはハンデの条件が知らされていない。

「昨日の段階でレートは候補生が四倍でガンドックが一倍です。ちなみに私は候補生に賭けました。彼らならやつてくれます」

鬼軍曹と候補生から恐れられる者の口から出る言葉とは思えず、笑ってしまった。普段しごかれている候補生達が聞いたら、さぞ驚く

のではないだろうか。「まったく。君が鬼軍曹と呼ばれているのが信じられない発言だな。今日の相手はガンドッグ小隊だろ。現役パイロットから見て候補生がガンドッグお得意の近接連携にかなうと思うか?」

田口軍曹はニヤリと笑い答えた。

「彼らが死なないためにだつたら鬼でも悪魔でもなつてやりますよ。もちろん個人の力は劣つていてるでしょうが、候補生にも連携と複数戦闘の捌き方は叩き込んでありますし、今回はハンデとして候補生を防衛側で指揮官あり、さらに数はガンドッグの一倍。指揮官も大佐殿と来れば勝てる見込みもあるでしょう。」「う

候補生の実力を冷静に分析し、戦闘の条件も加味しての判断だつた。単純に熱いだけではなく、冷静さも持つてている彼ならこの先も教育を任せられそうだ。

候補生達は弱点や欠点を毎日のように突かれ怒鳴られて大変なのが、戦場で生き残るために訓練をしてるのでそこは我慢してもらおう。

ただ、そんな鬼軍曹の元で訓練している候補生達だ。ちょっとした褒美があつても良いだろう。一つ軍曹に提案をする。

「軍曹。そこまで言うなら賭けに勝つたらあいつらに飯でもおごってやれ」「

苦笑いをしながら軍曹は了解した。

彼の感情は分からぬが多分こう思つてているのだろう。

（恥ずかしいから勘弁してくれ）と。

この後もガレージにつくまで候補生について語つていた彼の顔は実際に良い顔をしていた。私は小学校や中学校の頃、熱血教師の良さが分からなかつた。

部活動はさんざんな目にあつた記憶しかない。

ただ軍曹を見ていると、もしかしたら彼らもこの軍曹と同じよう

裏ではにこやかに笑つていたのかも知れないと思えてくる。

私が目指すべきリーダーとはどのような物がまだ正直分からぬ。

軍曹のような熱血教師風のリーダーも確かにありだとは思うが、多分それは6000人を超える人間が集まる空軍基地トップの姿では無いような気がする。

まだまだ至らない所も多いが、精進していく。軍曹の話を聞きながらそつ心に誓つた。

ガレージ入り口にて田口軍曹と別れ、模擬戦用に整備されている人型兵器を見上げていた。高さは4m一般的な2階建ての一軒家ほどだ。

「多武装携行システム」「Multi Arms Portable System」または略して「マップス」と呼ばれる。

この人型兵器は、FTE粒子の制御技術を最大限に活用した兵器である。

重力・光・電気・運動・位置・熱・質量などエネルギーを目的にあわせて変換することにより動力を得ることが出来る。

従来のエンジンではガソリンの爆発を利用しての運動から車輪を回したり、燃料の燃焼と噴射による反作用から推進力を得ていたのが、FTE粒子の制御を行うと重力のベクトルを真下ではなく真横に運動エネルギーとして変換したり、移動により生じる摩擦を電気エネルギーに変換して機体に貯めることも理論上出来る。

このような各種エネルギーの自由変換により機体の機動性が各段に向上すると考えられた。

その理論の元、いくつかの試作機が作られたが、操作が当初想定していた物より煩雑となり、脳波によるサポート・コントロールが必要となつた。

そこで人が拳動をイメージしやすい人型として機体開発が行われた。と教科書的には書かれているが、開発者の一人を知っている私は、技術者たちの趣味でこうなつたように思える。

この国の技術者はどうにも変態が多いので、やりたいことをやりたいようにやつた結果人型になつたのではないか。

開発者の一人から

「人型の方がかっこいいでしょ？」

と言われた時は思わず吹き出したものだ。

ただこの選択は当初予定していた以上に効果的で、開発を進めていく中、人型兵器が持つ従来兵器とは違った特性が、兵器としての重要性を向上させ、秘密裏の開発ながら予算が潤沢に出たそうだ。

マップス最大の特徴は手があることだ。

手をつけることにより武装変更が持ち替えだけで済み、機体に搭乗したまま単独で出来る。さらに肩や脚部や腰部にハードポイントを設け多様な武装を携行可能になった上、武器格納用バックパック等の追加装備によりあらゆる状況に対処出来る能力の高さが従来兵器に比べ格段に向上了していた。

ヤポネではそれまで経済的に多くの兵器を所持、維持するのは難しく、一機で複数の目的に使える兵器が非常に魅力的だったのだ。制空権の確保から地上の制圧まで幅広く運用が可能な兵器は喉から手が出るほどだった。

初めて実戦に投入された際に得られた機体評価は、飛行機より機動性が高く、ヘリコプターより小回りが効き、戦車よりも制圧力が高い。武器の変更による状況対処能力は歩兵並みで、武装さえ用意しているならあらゆる状況に対処が可能性である最強の現代兵器とつたわれた。

今では世界的に開発・販売メーカーが増加し、現在では大国に1メーカーは存在する勢いで広がっている。

「マップスも随分と種類が増えたな」

ヤポネの元祖マップスメーカー「菱田重工」の初代マップス「ゴースト」に乗っていた者からすると、この第一世代型は何度見ても感慨深く誇らしく感じる。

当初は脳波コントロールだつたせいもあり、適合者が少なかつたが、我々の操縦データをもとにAIが開発され、戦闘データから各能力に個性を持たせた第二世代のフレームの開発が行われたのだ。

AIを触媒にしてパイロットとマップスの融合をコンセプトに開発された第二世代型は、更にパイロットに合わせた細かなカスタマイズまで行えるようになった。

今一般に配備されているのがこの第二世代マップスで近距離、中距離、遠距離のどれかが得意なカスタマイズが出来る。

近距離型は装甲が少なめでスラッシュとしたシルエットをしていて、関節部分にあたる所々に小型の追加装甲がつけられている。逆に遠距離型は装甲が厚いためかガツチリとしているように見える。

しばらく立つていたら後ろから元気の良い声がかかった。

「よお、坊主！ ああ、いや大将！ また乗りたくなつたか？」

日に焼けた170cmくらいの整備主任だ。頭の髪の毛が最近減り気味で悩んでいて、少し小太りだががつちりしている。そして大声で喋る豪快な人だ。

このオヤジさんなかなかのカリスマ性を持つていて、多くのパイロット達からオヤッサンと慕われている。

昔からの知り合いとは言え、私は一応上官なのだが、特に喋り方は変えてこないらしい。さすがに坊主は最近減ってきてはいる。その代わりに大将というのもいかがな物かと思つ。

だが、若くしてこんな地位に抜擢されてしまったので、最初は信頼関係とか色々大変だつたところを、オヤッサンの昔の戦友ということで隊員たちの信頼を得られた。それに自分も前から世話になつてるので、細かいことは大目に見ることにしているし、こちらもある程度碎けて喋られるので良しとする。

他の所から視察が入る時は気をつけてもらえば良いか。

「おはよう。オヤジさん。たまに懐かしさで乗りたともなるが、さすがにブランクがあるのでな。現役には負けるだろう。しかも、最近のマップスは脳波コントロールが減つて、AIによる補助で非常に操作性があがつてているんだつて？ それについていけるかわからんよ。それに残念ながら今の私は司令という立場だ。マップスに乗つて前線で戦いながら全体指揮はとれないさ

オヤジさんは豪快に笑つてきた。まるで分かりきつた冗談が通じなかつたのを隠すようだつた。

「まつ、それなら仕方ない。気が変わつたらいつでも言えよ。あんの一言があればあつという間に整備してやるからよ。なんと言つてもあんたは初代マップス中隊の隊長だ」

それにしてもとオヤジさんが話題を変える余図をする。

「マップス乗りも随分増えたよな。十年前までは大将含めて10人だつたのが、今年はここだけで候補生が50人か。すごいもんだな」「さつきも言つたように操作性が向上して誰でも使えるようになつたからな。まあ、この基地が特別多いつてのもあるんだが、上の連中かなりの数押し付けてきた」

「それだけ期待されてるんだろ。マップスの実戦経験がある佐官は大将だけなんだからよ」

「あの10人に選ばれた上に士官学校出は私だけだつたからな。ものすごい運だよ。おかげで白い眼で見られることがあるのがたまに傷だが、仕事の成果で見返せるように努力するしかない。私の成果にも繋がる新人を育成してくれる田口軍曹には感謝だな。私には基礎まで細かく教えられるほど暇がない。面倒な書類がこうも多いとは思わなかつたよ。マップス乗りがする仕事じやない」

やれやれと右手で頭を押さえて大げさに首を振る。

「心中察するぜ。ちなみにだ大将。今日の書類を追加しても構わないかい？ 菱田重工の松平の坊主からマップスの第三世代フレームが完成すると報告があつてな。採用出来るように申請書を頼むわ」とんでもないことを凄く軽く頼んできた。

この基地に新兵器の実験部隊を擁するので、他の基地に比べれば申請しやすいとは言え、去年初めて新しいライフルを申請した時は申請の許可が降りるまで一週間はかかつた。

まあ、私の不手際がその原因の大半を占めていた気がするのは内緒だ。

申請書類以外にも集めるデータの量が多く、データを送る度に送信

許可の書類を書かされたのだ。

しかもその後のライフル返却手続きも同様に面倒だった。

上層部がやっている正式採用の手続きに比べれば遙かにマシなのだろうが、新型機だとそれくらいかかるのだろう。

考えるだけで頭が痛くなりそうだが、将来の兵士達のためなら仕方ない。

「分かった。後で資料をこちらに送ってくれ。松平もかんでいるなら良い機体だろうしな」

松平というのは同じくゴースト隊にいた一人で、もともと菱田重工の開発者兼テストパイロットだったが、特殊部隊として徴収され共に戦った戦友だ。

彼によつて戦場で得られたデータから数多くの兵器が作り出されていいる。

大事な仕事も頼めたし、残りの時間で最終チェックをしてくるといい残してオヤジさんは整備に戻つていった。

「そのうち久しぶりに乗るのも悪くないかもなんかの愛機と戦友のことを思い出し、口から漏れてしまつた。

オヤジさんが整備に戻つて行つてくれて良かった

## 第一章「ブリーフィング」

### 第一章「ブリーフィング」

整備主任のオヤジさんと話していた間に候補生達がガレージ入り口に集合していた。

田口軍曹が点呼を取り模擬戦の心得を語っている。予定ではこの後各種機体のチェックを行いブリーフィングだ。その間に私は、相手をするガンドック小隊に簡易ブリーフィングを行うことになつている。

集まっているガンドック小隊の前に立ち説明を始める。

「今日の訓練は候補生だけではなく、諸君らの訓練もある。シチュエーションは通信障害下で対空迎撃を低空飛行でかいくぐつてからの敵地潜入だ。作戦目標は基地防衛部隊の制圧およびジャミング設備の破壊である。なお、今作戦は事前に敵部隊の武装・数の判断がつかなかつた場合を想定している。武装は対マップス用を装備し、施設破壊は同武装をもつて作戦にあたれ。バックアップ無しの状態での戦闘だ。敵の場所・目的施設は機体に搭載されている光学レーダー・熱源探知のみで索敵しなくてはならない。このような制限条件下的作戦だ。諸君らには言うまでも無いが、部隊内の連携を戦闘行動だけでなく情報においても上手くやれ。以上だ。何か質問は？」

隊長が手を挙げ質問をした。

「ジャミング施設の破壊を行つた場合、バックアップは回復するのでしょうか？」

なるほど。さすがに隊長をやつてているだけあって状況の悪さを認識し、打開策の検討も行つてている。

「もちろんイエスだ。ジャミング施設破壊に成功した際は通信が回復し、衛星からの敵部隊分布図がレーダーに反映される。しかも、喜べ。橋オペレーターからの激励付きだ。他に質問は？」

何処から感嘆の声が漏れた。ガンドッグ4か。分かりやすい奴め。ガンドッグ隊から更なる質問は5秒待つても無かつたので早速指定ポイントに向かつてもらうこととした。

「よし、これ以上質問は無いようだな。ルーキーに負けるなよ！」

「ガンドッグ小隊出撃」

「サー！ イエッサー！」

ガレージでの簡易ブリーフィングを済ませて、ガンドッグ隊は各自のマップスに乗り込み出撃準備を始めていた。私は見送りをしながら整備班からガンドッグ隊の機体構成・武装構成の資料を貰い、その場を後にした。

「さてと、次は候補生か。正規パイロット相手とは言え、ハンデとして限られた情報量、数、地形、指揮の有無と来て負けたら敗因は私になつてしまふな」

指揮官たるもの周りが不安にならぬよう構えておくべきなのだが、周りに人がいなかつたので、ついつい苦笑いを浮かべてしまった。一つ息を吐いて気持ちを入れ替え、候補生達の方に向かうと既に私が来るのを待機していた。どうやら軍曹から心得も機体チェックも終わったようだ。

ここからは私の仕事が始まる。彼等の前に立つと同時に候補生が揃つて敬礼をした。少し表情が固いように見えるが、正規パイロット相手に模擬戦だから仕方ないか。

いや、それか指揮をとるのが私だからかもしれないな。私も士官候補生時代は上官が怖かった。少し懐かしさを覚えたが、思い出に浸る暇は無い。

敬礼を返し挨拶を始めるとして。

「候補生諸君、今日君達を指揮する坂本だ。今まで君達が血も滲むような努力をしていることは知つていて。今日の相手は確かに強い。1対1なら勝ち目は薄いだろう。だがしかし、君達は彼らに負けない絆を持っている。今まで訓練を共にしてきた時間は何よりも強い経験だ。その絆をもつて正規パイロットに勝利して見せろ。諸

君らの健闘を祈る」

軍曹に目配せをすると次の指示を出してくれた。

「分かつたかひよつこども。大佐殿の期待を裏切るなよ！ では、ブリーフィングルームに移動せよ！ ちんたらするな！」

軍曹の怒号と共に候補生達はブリーフィングルームに走つて行つた。廊下での会話を思い出してイタズラ心が芽生えた。

「じついうのを世間ではなんといったかな」

軍曹が不思議そうな顔をしている。

「そうだ。ツンデレというやつだ。これからは鬼軍曹ではなくツンデレ軍曹と呼ばれるのはいかがかな？」

軍曹が困つたようにひきつた笑いをしている。ビリやうりツンデレの意味はわかつてゐるらしい。

「司令がそうおっしゃるなら。いささか教官としての威厳にかけるので遠慮したいのですが」

冗談が通じないほど真面目な男だ。しかも、まずは田上を肯定してから遠回しな否定を使いこちらをたててゐる。やれといつたら本当にやつしそうなので、からかうのはじの邊で止めておこつ。

「もちろん冗談だ。すまなかつたな。後はモニターで観戦をしてくれ」

軍曹は安堵の顔をして敬礼をした。

「イエッサー。ではあいつらを頼みます」

任せとおけ。という意味を込めて敬礼を返す。

「君の教え子だ。負けるわけが無い」

軍曹と別れブリーフィングルームに向かつと、中で既に候補生が待機していた。中に入るしつかり敬礼をしてくる良く出来た奴らだ。彼らのためにもしつかり仕事をしよう。

ブリーフィングのための大型モニターをつけて作戦を説明する。

「今回のシチュエーションは本隊が陽動にかかり、拠点兵力が少な

い状態での奇襲をかけてくる敵迎撃だ。拠点施設にはレーダーのジャミング設備が設けられており、敵の索敵はカメラによる光学レーダーと熱源探知のみだ。しかし、ジャミングが破壊されると通信が回復し、こちらは丸見えとなる。いかに施設を守りながら敵を倒すかが鍵となる。具体的な数字は次に話すが、まずはここまで、シチュエーションについて何か質問は？」

手を挙げる者はいないようなので、次に進める。

「敵はマップス1小隊のみ。数にするとマップス5機だ。敵作戦目標はジャミング施設の破壊、拠点制圧とそれに伴う防衛部隊の撃破と予想される。つまりこちら側は敵の全機撃破が脅威を取り除けるただ一つの勝利条件だ。なお、今回はジャミング施設の破壊を防げなくともよい。が、防げたらちょっとしたボーナスを進呈しよう。勝利条件について何か質問は？」

後列に位置していた1人が手を挙げたので質問を促した。

「サー、敵の撃破判定はどのように行われるのでしょうか？」

「今回実弾兵器にはペイント弾を利用して命中箇所、命中時弾速をもとにダメージ判断を行う。また、粒子ブレードや粒子ライフルのようなエネルギー兵器は命中時の熱変化によりダメージを判定する。なお、訓練用に粒子密度を大幅に下げ被弾による損傷は起きないよう設定してあるため安心してくれ。最後に武器によって係数がある。同じ当たり箇所でも発射武器によりダメージは変化するので被弾が少ないからダメージが少ないと思って油断するな。HUDにダメージの蓄積は表示されるので、機体のダメージチェックを常に怠るな。他に質問は？」

「ありません。ありがとうございます」

「よし、では次だ。これからは敵部隊迎撃のための作戦を説明する。まずは、敵部隊の編成を見て貰おう」

ガレージで整備班から貰ったガンドッグ部隊の資料を展開させていく。

「近距離格闘戦に特化したファイタータイプが一機、近中距離が得

意なアタッカータイプが三機、そして遠距離に特化したスナイパー・タイプが一機の編成だ。各機体スタイルに合わせた武装は勿論サブウェポンとして、苦手距離を埋める装備も携行している。ファイターアイは足の速い機体にショットガン、粒子ブレード更にアサルトライフルを装備。アタッカーは旋回性能の高い機体にマシンガンとレールライフルそしてミサイルを装備。スナイパーは防御能力の高い機体に長距離用の実弾ライフルと粒子砲を装備している。正面から戦えばこちらの数が二倍とは言え苦戦するのは目に見えている。そこで、諸君らには正攻法ではなく策を持つて敵を打ち破る必要がある。今回の戦闘区域マップを見て貰おう。」

画面に基地周り50km程度の地図を表示した。この基地は南には森と山と海、北は山に囲まれた所に位置している。

「敵は南の海上から飛行してくる。待機ポイントは基地から南方30kmの海岸、基地から南方27km海岸付近の山の基地側、基地南方24kmの上空、そして基地南方20kmの森林地帯だ。まずは海岸に足の速いファイターで三機待機してもらおう。敵部隊が50km圏内に入つたら、海上に移動し敵と交戦。近中距離戦闘が可能な距離になつたら即転身し、後退。牽制射撃をしながら山を抜けろ。抜けたタイミングでスマートグレネードを炸裂させる。山を敵も抜けたら、上空に待機してもらうアタッカー一機とスナイパー一機により敵を上から攻撃。散開したタイミングを狙つて山に待機しているアタッカーミニ機で背面から敵スナイパーを攻撃し他の機体に割つて入りながら敵を分断する。分断した機体に同じく山に待機しているファイター一機が近接攻撃をしけ、可能な限り早く撃破。さらに援護に向かう敵には基地南方の森林地帯よりスナイパー一機で牽制射撃をしかけ敵の合流を遅らせる。スナイパー撃破後はアタッカーミニ機ファイター三機により敵ファイター一機を撃破する。同時に、スナイパー一機による砲撃とファイター・アタッカーにより敵アタッカーミニ機を近接戦闘に持ち込み、ファイターの援護を阻止する。ファイター撃破後は残存戦力全てで、残りを叩くのみだ。まとめると

と不意打ちを連続で行い分断と包囲による個別撃破作戦だ。質問は？」

童顔で一部の男にまで人気の沖田が沈黙をやぶる。

「サー。それぞれの配置はどうなつてているのでしょうか？」

丁度次に説明する内容だったので先に進めるこことを兼ねて答える。  
「各自携帯端末を取り出せ。それとのコールネームおよび配置、

機体と武器構成のデータを送信してある」

コールネームは最初の陽動がソード、上空待機班がクロスボウ、山に伏し分断をはかるのがアックス、分断した敵を落としにいくのがランスだ。それに各々の番号をつけている。

「本日は諸君らの部隊をアームズとよばせてもらひ。他に質問はないか？」それぞれの役割が判明して皆の緊張感が表れている良い顔だ。後は各々の奮闘に期待する。

「よし、質問は無いようだな。各員健闘を祈るアームズ出撃せよー。」「サー！ イエッサー！」

候補生が部屋を駆け足で出て行ったのを見送り、こちらも司令塔に移動する。既にオペレーターも司令塔にいるはずだ。

候補生の資料に書かれている能力が新人パイロットにしては意外に高く、彼らの成長ぶりに口元が思わずニヤケてしまった。

「軍曹の言う通り1対1なら Gandicing が勝つだろうが、複数相手なら危ないかもな。Gandicing の対応が楽しみだ。」一つ深呼吸をして頭を落ち着かせて司令塔に向かつた。

## 第二章「陽動」

### 第三章「陽動」

司令塔では既にオペレーターが準備を完了していた。作戦区域の地図を映し出した大型モニターを確認すると両部隊とも位置についていた。準備の最終確認をとろう。長い髪を縛つてポニー テールにしているオペレーターの橋に連絡を入れてもらつ。

「本部よりガンドッグ全機へ。こちらオペレーターの橋です。みなさん準備は良いですか？」

「ガンドッグ1レディ。いつでもいける」

「ガンドッグ2レディ。待ちくたびれましたよ」

「ガンドッグ3レディ。余裕です」

「ガンドッグ4レディ。良いとこ見せちゃうぜ？」

「ガンドッグ5レディ。問題無い」

それぞれ個性の出る応答だ。この組合せで良いくまくできているのが面白い。次は候補生の確認をとつてもうひとつ。

「本部よりアームズ全機。こちらオペレーターの橋です。整備班より全員マップスに搭乗済みと連絡が来ています。間違いないですか？」

「アーフマーティブ。」

候補生全機から通信が入った。こちらも準備完了だ。後は私が模擬戦開始の号令をかけねば始まりだ。指揮官用の机のマイクをオンにして、声をはる。

「ガンドッグ全機。アームズ全機。これより、実戦型模擬戦を開始する。各員の健闘を祈る。ミッションスタート！」

「イエッサー！」

全機からいい返事が返ってきた。やる気があつて実に頼もしい。モニターを見るとそれぞれが動き出していたので、橋にガンドッグ

に課したハンデの連絡と実行をしてもらひ。

「本部よりガンドッグ全機へ。これから先はジャミング地帯です。こちらからのレーダーを始めとする通信バックアップが行えません。注意してください」

「ガンドッグ1。ラジャー」

「橘ちゃん、ジャミング施設なんかとつとどぶつ壊すから待つてねー。あ、でも先に頑張ってとか言ってほしいな」

ガンドッグ4の軽口に橘は表情一つ変えないで受け流した。

「ガンドッグ4。作戦中です。私語はつつしんでください」  
かわいい顔して実にクール。ガンドッグ4はお構いなしにそんなとこが素敵とまだ減らず口を叩いていた。

「通信を遮断します。頑張つて下さい。応援します」

橘の操作により、こちら側からの通信は入らず、向こう側からの通信は入つていてる状態になつてるので、歓喜の声がダダ漏れになつていた。

「くうう、橘ちゃん可愛い！ マジ可愛い！」

ガンドックの興奮ぶりにおのの突つ込みを入れてるのが聞こえて思わず苦笑いをする。

「作戦中ですよ。まつたぐどうしてあなたはこうも頭の中が空っぽなのか。そもそもですね。あなた一人に向けて言つた訳ではないでしょう」

とやたら理屈っぽくつこむ女性の声はガンドッグ2。

「バカ。本部には通信丸聞こえ。今頃笑われる」「  
と抑揚のない女性の声でつこむのがガンドッグ3。

「問題無い。いつものことだ」と冷静で低い男性の声はガンドッグ

5。

「お前ら仲が良いのは結構だが、そろそろ真面目にやれ」

と隊長のガンドッグ1が最後に締めるのが彼らの様式美だ。そんなつっこみの嵐の中ガンドック4がどれだけ橘が自分に親切にしてくれるかと抗議の声をあげている。

「君も苦労してそうだな。橘君」

きょとんとした顔でこちらに振り向いている。思わず言ってしまった作戦中だった。

「いえ、それほどでもありませんよ。彼一人だけじゃないので慣れていますし。それにこの程度でやる気を出してもらえるなら安いものですよ。案外男ってちょろいですよ?」

ニッコリ笑いながらとんでもないことを言い出した。今を勘違いしている連中が聞いていたら大変かわいそうなことになりそうだ。今はこれ以上余計なことは言わないよう仕事に戻つてもらおう。というか計算でやつっていたのか、誰が結ばれるかは知らないが頑張れ。

「そうか。その人心の扱い方については非常に興味深い話題だが、お喋りはここまでにしておこう。アームズの方はどうなつていてる?」  
橘は自分の端末に向き直つて報告する。

「ソードが残り三十秒で待機地点に到着。他のチームは既に目的地で待機、迷彩起動中です。ガンドッグが海岸に到着するのは大体5分後かと」

作戦地図をこちらも確認する。思つたより早いな。アームズ各機のレーダーにも情報は転送してあるが、注意を促す。

「ビッグハットよりアームズ全機。敵部隊が接近中。レーダーで確認出来ているか?」

「アスマーティブ」

よし、全員レーダーを見ている。次に最初に交戦するソード三機の様子を確認しよう。

「ビッグハットよりソード全機へ、敵部隊との推定交戦時間まで三分を切つた。指定ポイントにダミーバルーンを射出し敵との交戦を始める」

「ソード1了解」「ソード2了解」「ソード3了解」

山と山の間を挟んで東西にダミーを一機ずつ設置したことをモニターでこちらも確認をする。

「ソードーよりビッグハット。ダニーの設置が完了しました。これより敵陽動にあたります。」

「」ひらビッグハット。ダニーの設置を確認した。陽動で撃破されるなよ。気をつける」

「「了解」」

そして一分後、ついに海上10m、彼我の距離が6kmで双方が敵を補足した。「 Ganddigg」

「アームズ」

「「エングージ！（交戦開始）」」

交戦開始の合図とともに、最初に発砲したのはアームズ側だった。距離は6km。通常アサルトライフルで当たられる距離ではないが、弾は当たらなくとも良い。ただ注意をひきつけるための、射程外からの射撃だ。

Ganddiggの方も通信を聞く限りこの射撃に戸惑っている。

「この距離でアサルトライフル撃つてくるなんて、候補生達よつぽど緊張してんのか？」この距離はロングレンジライフルでも割ときつこぞ」

肩と腰と脚部についているサイドブーストを噴射し、大きく横に一回転する回避行動を取りながら曲芸飛行でGanddigg4が少し小馬鹿にした口調で疑問を口にすると。

「油断するな。常識を無視した行動には裏があるかもしけん。全機周りに気をつけ、回避行動をとりながら前進。真っ直ぐ飛ぶなよ。距離による減衰があるとは言え当たると面倒だ。Ganddigg5は、ロングレンジライフルで応戦しろ」

「Ganddigg5ラジャー。スコープモードで狙撃する。視界が狭まるので何か情報があれば通信を頼む」

隊長であるGanddigg1は緊張がゆるまないようじつかり締めて反撃にうつる。

距離がまだあいている状態とは言え、真っ直ぐ飛んだら当たる可能性があるのと、本命の攻撃がいつどこから来るか分からぬ状況だ。

いきなり距離を詰めず回避を優先する彼の判断は正しい。こちらもソードに通信を入れる。

「ビッグハットよりソード全機へ。交戦開始を確認した。敵スナイパーの射程圏に入っている直撃を防ぐためにシールドを展開。シールドの隙間から牽制射撃を続けろ」

「了解」

各機体が脚部・腰・背中に装着された浮遊型追加装甲6枚を展開し防御体勢に入る。FTE粒子の制御により盾を機体周りの空間に展開する装備だ。

実体装甲だけでなく、粒子を高密度展開し高密度粒子空間を機体周りに作ることによって弾の運動エネルギーを変換し威力を殺したり弾く粒子型のシールドもある。どちらも一長一短あるが、共通する欠点として展開中は速度があげられない問題がある。実体装甲は本体に速度が追いつけなく、粒子型は密度が安定しなくなり防御能力が落ちる。

とは言え、改良によりそれなりに速度は出せるようになつたようだが、ガンドッグが回避に徹しているのはこのためだ。前進しなければならない局面で速度は落としづらい。

ガンドッグ5が狙いを定める間にソード三機は実体装甲を機体前面にアサルトライフルの先端が隙間から出るよう展開し、射撃を続ける。おかげでガンドッグ5が最初に撃つた弾三発は防ぐことが出来た。

ソードが防御体勢をとり、弾が防がれたことをガンドッグ5が早速報告する。「ガンドッグ5よりガンドッグ1へ。敵、浮遊型装甲を展開し防御姿勢をとっている。距離は現在5km。射撃は当てられるが、防がれている」

「ガンドッグ1から各機。牽制射撃を加えながら距離を一気に詰める。フォーメーション（ハント）が可能な距離まで他方面から攻撃が無ければ、そのまま仕留めるぞ。全機高度を一旦上げるぞ」

「ラジャー」

ガンダッグ全機が上昇のために脚部・背部ブーストの出力を上げ一気に高度を100mほど上げた。

防御体勢に入つた相手を切り崩すには近距離からの多方面攻撃が有効と判断し接近を選択。さらに、恐らく近づいたタイミングで伏兵から攻撃があると考え、敵の位置がわかりやすい上空に高度を上げだのだろう。

このタイミングで伏兵に気をつけているなら、そのまま利用させてもらいうか。「ビッグハットよりソード全機。シールドを展開しながら後退。敵との距離が2kmを切つたらシールドを解除し、全速力でダミー設置ポイントまで後退せよ」

「「ラジャー」」

距離が4kmを切り、アタッカーであるガンダッグ2、3、4からのレールライフルの射撃が始まった。

今所、ソード三機は機体を左右にふつて回避行動をとりながら後退し、浮遊装甲で直撃も防げている。

ガンダッグの方は上下左右にブーストを噴射し回避しながら、レールライフルを撃ち続けたガンダッグ4がなかなか敵の撃墜が出来ないことにぼやき始めた。

「自分も乗つて言うのはなんだけど、相手をするのが面倒というか、マップスつてホント頑丈だな。戦車やらヘリならとっくに壊れてるだろ」

ガンダッグ2が話題に乗つかり応答する。

「さすが、最高の現代兵器と言われているだけあって、簡単には落とせないですよ。ただでさえ、機動力が高くて捉えにくい上に装甲も堅い。しかもその装甲より頑丈な浮遊装甲を展開中ですし、そもそも浮遊装甲も頑丈じやなかつたらわざわざ武装として登録されていませんよ。それにですね」

いつもの長話をされると面倒だと思ったのかガンダッグ3が制止をかけた。「先輩長話はストップ。距離が3kmを切りました。残り1kmでハントの距離です」

相変わらず戦闘中でも声に抑揚がない。しかし、回避行動と射撃をしながら余裕で会話するとは良くやるよ。対照的にソードは攻撃を受け続け余裕が無くなつて来ている。

「橘。今ままのスピードだと何秒後に目標距離になる?」「三秒ほどで答えを出してもらえた。

「三十秒後です」

何とか持つだらう。続けざまの攻撃で混乱に陥らないよつと声をかける。

「ビッグハットよりソード全機へ。残り三十秒で敵との目標距離だ。もう少し耐える。浮遊装甲はそう簡単には破壊されない。今まま上手く防ぎながら後退だ」

「「ラジャー」」

まだ大丈夫。パニックにはなつていない田口軍曹は良い教育をしてくれている。徐々に距離が詰まり3kmを切つたところでガンドッグが速度を更に上げた。

「ガンドッグ1より、ガンドッグ全機へ。フォーメーション(ハント)」

「ガンドッグ2、お任せあれ」

「ガンドッグ3、仕掛けます」

「ガンドッグ4、待つてました!」

「ガンドッグ5、いつでもいける」

ファイターのガンドッグ1を先頭に左右にアタッカーのガンドッグ2と3がつき、その後ろにガンドッグ4、そしてスナイパーのガンドッグ5が続く。

ソードは横に1、2、3と並んでいたが、ガンドッグ5がソード2に右手のロングレンジライフルをソード3には左手の粒子砲を連續で撃ち始めた。

ソード2と3の意識を防御に集中させ、ソード1には残りの四機で集中攻撃を始める。

距離を見るとまだ2・5kmだが、通信から聞こえる候補生の緊迫

した声と状況から、さすがにこれ以上近づかれると被弾する可能性があると判断した。

「ビッグハットよりソード全機へ。敵が本気になった。予定より早いが状況が悪い。こちらでポイントを指定する。全速で後退しろ」「ソード・ラジヤー。ロックアラート鳴りっぱなしで、生きた心地がしなかつたですよ……」

ソード三機は機体を反転させ、展開中の浮遊装甲を全て背面に取り付け背中、腰、脚部につけられている全てのブーストを噴射し、後退を始める。転身した際に多少の被弾があつたようだが、浮遊装甲を全て背面に取り付けた結果直撃は免れた。

後はうまく後ろからの射撃を避けるだけだ。

ただ、ガンドッグも簡単には逃すつもりは無いらしい。自らは真っ直ぐ飛行しながら相手には執拗な射撃で回避行動をとらせ、距離を詰めようとしている。同じ距離を進むにも真っ直ぐとジグザグや回転の回避行動が混じつた進み方では明らかに真っ直ぐが早い。

だが、ソードは足の早いファイターのみの編成に対し、ガンドッグは足の遅いスナイパーも混じっている。敵を追いかけるのに必死になるあまり味方を孤立させ、伏兵に奇襲される危険は犯せない。その結果、足の遅い機体にあわせた速度となつたので、徐々に両者の距離が開いていく。ガンドッグ4が呆れて通信で叫んでいる。

「おいおいおい、突っ込んできたと思って、本気で攻撃し始めたら、本気で逃げだしたよ？！どういうことよ？やる気あんの？」  
ガンドッグ2がそれに呆れて通信を返した。

「やる気がないのはあなたの頭ですよ。我々より少ない数で仕掛けで、距離が縮まつたら後退つてどう考えても陽動でしょう。待ち伏せか後ろに既につかれているかのどちらかですね」

「ああ？俺は常にやる気に満ちあふれてるよ！それにレーダーには敵影は映つて無いぞ。熱源反応も今の所あの三機しか無いし挟まれてはいないだろ。大体、ルーキーにそんな小賢しいこと出来んのか？」

ガンドッグ5が更に通信を割り込む。

「ガンドッグ4落ち着け。相手を過小評価しない方が良い。だが、今スコープでも後ろを確認しているが、確かに敵影は見えない。まだ挟まれてはいないようだ」

そして、ガンドッグ3が続いた。

「となると、考えられるのは待ち伏せですか？」

最初に待ち伏せの可能性を提案したガンドッグ2が返事をする。

「いきなり海の下から飛び出して来るとか考えられますけど、陸地で待ち伏せというのも考えられますね。何にせよバックアップが無いのは厄介ですね。出来ることは良く周りを観察するのと突然敵が出てくることに対する心の準備くらいで jóうか」

やれやれとため息混じりに説明を終えると、隊長のガンドッグ1が指示を出す。

「ガンドッグ2の言つ通り待ち伏せの可能性が非常に高い。敵が反転した瞬間には気をつけろ」と部隊に注意を促し、話を続ける。

「ただし、注意のし過ぎで速度が落ち、捕捉済みの敵を見失い、不意打ちでも受けようものなら話にならない。基本このままの速度で飛行し、補足可能距離を維持するために適宜速度を上げるぞ」

「「ラジャー」」

良く敵を見て警戒していく。良いチームだ。これは私の策略が見破られるかもしれないな。

モニターに映るレーダーを見ていると、何とかレールライフルの射程圏から抜け出したソードは後少しでダミーのある海岸線に着くところであった。少し緊張感が切れたのか私語が聞こえる。

「おい、伊東。佐藤。さつきのすごかったな。ロックアラート鳴りっぱなしで、浮遊装甲が銃弾を受ける音がガンガン鳴つてさ。実弾だつたら危なかつた……」

ソード1がコールネームではなく名前で呼んでいる。

伊東と呼ばれたソード2が返事をする。

「コールネームじゃなくなつてるぞ斎藤。つてこいつちもか。俺も口ツクアラート鳴りっぱで、粒子砲撃たれてたから田の前が緑でいっぱいになつてたよ。装甲間に隙間を作つたらやばかった」

ソード3が会話に乗つかる。

「後退が早まつて良かつたね。もう少しあのままだつたらやばかつたよ。つて、うわー？ ソード1の浮遊装甲がペイント弾の色で真つ赤になつてる！ つて私のもか」

「あんだけ撃たれればなあ……」

「私達、良く撃墜判定にならなかつたよねえ」

ソード1が大きくため息をついたようだ。海岸線がもう田の前に迫つて来ている。海岸線付近でもう一度敵を引きつけなければならぬいと思うとため息の一つでもしたくなつたのだろうか。

私は彼らの気を落ち着かせるために、お喋りを聞かなかつた振りをしていたが、そろそろポイントなので気をもう一度引き締めて貰うために指示を出す。

「ビッグハットよりソード全機へ。まだ誰も落ちていしないな。ポイントは田の前だ。ここでもう一度敵を引きつける。気を引き締めろよ」

了解と応答が返つてきた。ここからが正念場だ。

ソード3機がポイントに到達し機体を反転させ、浮遊装甲を再度展開し敵を迎えた。

「ガンドッグ1より各機。敵が足を止め、こちらを向いている。恐らく罠だ。牽制射撃を加えながら左右に分かれて挟み込み、待ち伏せより早く敵を撃破するぞ。フォーメーション（クローコー）」

ガンドッグ1の合図で部隊が左右に分かれた。

左にガンドッグ1と4、右に残りのガンドッグ2と3と5に分かれた。

左右どちらかに注意を逸らせ浮遊装甲をずらし、ずらした隙間に弾を打ち込む戦術だ。

この戦術は部隊の息が合えば合つほど防御を切り崩しやすくなる。

ソード3機が防御で敵を引きつける予定だが、非常に相性が悪い戦術だ。

しかし、次の仕掛けのために今回はギリギリまで近づいて貰わなくては意味が無い。

そのためにもソード3機にはゆっくりと下がつて貰わなければならぬ。

動きの速い回避起動では潜伏中の部隊が捕捉される危険や仕掛けの先に行かれてしまう恐れがある。

「ビッグハットよりソード全機へ。密集防御陣形を取り、防御面に隙間を作るな」

ソード一機を前面に残りの一機を三角形になるよう背面中合させで密着させ、浮遊装甲を各機の前面に展開することによって前方180度を防ぐ陣形だ。

距離が空いている間はミサイルと銃弾の雨をフレアと浮遊装甲で何とか防げていたが、距離が1kmを切った時、ガンドッグ3が他の隊員に通信を入れた。

「先輩。ガンドッグ5。ナイスアシスト」

ソード2が初めてダメージ判定を伴う被弾をする。

どうやら、ガンドッグ5から撃たれたロングレンジライフルを防いだのは良かつたが、同時に撃たれていた垂直ミサイルに気付かず対応が遅れ、フレアではなく浮遊装甲を上に向けて防いだところ、空いてしまった隙間を撃たれたようだ。

「こちらソード2、左脚部に被弾した。損傷は軽微。つて、あぶねつ！？」

「ソード2！ ミサイル！ また上からの垂直ミサイルだ！ 気をつけろ！」

「右からもミサイルが来るよ！ 私がなんとかする！」

ソード3が装備していたフレアを射出し、ミサイルをそらしたのは良かったが、防戦一方だったせいもあり、フレアの残弾数が少ない。しかも、激しい弾幕を防ぐのに精一杯でなかなか反撃が出来ずにつ

るため、ガンドッグの攻撃を止めることが出来ない状態だ。しかし、両者の距離は1kmを切った。目標の500mまで後少しだ。

500mまで近づけばガンドック小隊がソードの防御陣形をめぐるため、更に接近して後ろに回っこもうとするはずだ。

「橋。ソードに後退のカウントダウンを頼む」

了解です。と返事をし、橋が距離のカウントを始める。

900……「後少しが。ソード2ソード3何とか持たせらるべ！」

800……「ソード2フレア残数0！ ミサイルはそつに任せた！」

700……「ソード3」ひらもフレア残数0！ いっちのフレア全部切れたんじやないの？！」

600……「ビッグハットよりソード全機！ 後退用意！」

500……「ソード全機後退してください！」

「ラジャー！」

合図とともにフラッシュユグレネードを射出する。

強烈な閃光で一時的に機体のカメラ機能を麻痺させる。

その一瞬の隙をついてソード3機が全速で後退をする。

「一度も逃がすかよ！」

ガンドック4が加速しソードを追いかける。

「ガンドック4！ 先走り過ぎです！ 隊長どうしますか？」

ガンドック2がガンドック4の制止をかけながら、隊長の判断を待つ。

その間ガンドック4は文句を言いながらも制止している。良い判断だガンドック4。

「仕方ない。罠の可能性もあるが、追いかけるしかあるまい。後方に注意しながら行くぞ」

隊長の判断が下され、ガンドック小隊は前進しながら左右に分かれ、いた部隊を合流させた。

ガンドックが合流した後、ガンドック5から数発狙撃を放つたが、

ギリギリで回避されてしまった。

そして遂に策を仕込みに仕込んだポイントにガンドック小隊が到達する。

## 第四章「反撃」

### 第四章「反撃」

「ビッグハットよりソード。ダミーに熱を入れ、五秒後に全スモーケグレネードを後方に炸裂せろ」

「了解」

待機しているチームの出番が迫っているのでそちらにも確認をとる。

「ビッグハットよりクロスボウ。スマーカーが行動開始の合図だ」

「クロスボウ1了解」

「クロスボウ2了解」

よし、準備は大丈夫そうだ。

後はガンドッグがこちらの思惑通り動けば勝てるはずだ。  
ソードの遠隔操作により、ダミーが熱を持ちガンドッグのレーダーに表示される。

いち早く気付いたガンドッグ2が通信で報告を入れた。

「隊長！ 8時と16時の方向に敵熱源反応を確認！」

「3・4は機体を回転！ 後ろの警戒をしながらついてこい！」

「分かりました」

「まかせとけって」

ガンドッグ3と4は胸部にあるバックブーストを片側だけ噴射し一気に機体の向きを反転させ、バックブーストに加え脚部を前に突き出しブーストを噴射することによつて速度を維持しながら前進を始めた。

うまく引っかかつてくれた。

そして、予定通りスマーカーがソード3機によつてまかれ、ガンドッグ小隊がスマーカー内に突つ込んだ。

「レーダーロスト。ジャマースマーカーのようです」

ガンドッグ3が報告を入れる。

「隊列このまま。前方・後方からの攻撃に注意しろ」

そのまま突破することを選んだようだ。

5秒後スマートを突破したところで、ソードとクロスボウからの攻撃が始まった。

前方のソード3機からの射撃を回避することは出来たが、上空のクロスボウ2機から降り注ぐライフル弾、ミサイル、炸裂弾に反応出来ず、後ろを向いていたガンドック3と4にダメージを与えた。

「こちらクロスボウ1。ソードのみなさんお待たせ！」

上からの攻撃を想定していなかつたため、ガンドック小隊の対応に焦りが出ていたようだ。

「おいおい！？ 上かよ！ レーダーには映ってなかつたぜ？」

ガンドック4が想定外の攻撃に驚いて叫んでいる。

「ジャマー圏内の上に、ジャマースマークまでまかれたんじゃ 気付かないよ」

やられたとガンドック3も抑揚の無い声で悔しがっている

「全機散開！」

そんな中でガンドック1は爆発半径の広い炸裂弾に密集は危険と即判断し、すぐに散開号令で部隊を前方に散開させる。

よし、ここまでは想定通り。

現在ガンドック小隊のレーダーにはソード3機とクロスボウの一機、そしてダミーの三機が映っている。

前を突破してその包囲から抜けるつもりのようだったが、ガンドック5がダミーに気付いた。

「隊長、先程後方に現れた敵影ですが、この状況で全く動いていません。こちらの注意を後ろにそらせるダミーです」

よく気付いたが遅い。それにむしろ気付かれた方が好都合だ。

「よし、5は後方に下がり敵の遠距離砲撃を黙らせろ。残りで前方の敵を落とすぞ」

ガンドック1の指示通りガンドック5は山側に後退し、残りが前進した。

どうやらアッ克斯を出す前に分断に成功したようだ。作戦を少し変更する。

クロスボウ1はロングレンジライフルでガンドッグ5と撃ち合い、距離を敵部隊から離していき、ソード三機とクロスボウ2が残りの敵四機の対処を始めた。

上空のクロスボウ1が狙撃に集中出来るように敵を抑えるのが彼らの仕事になる。

分断に成功した今ここで一気にガンドッグ5を落とすか。

「ビッグハットよりアッ克斯全機！ 予定とは違うが、田の前にいるスナイパー型を落とせ！」

「アッ克斯1了解。撃墜スコアは俺の物」

「アッ克斯2了解。逆に落とされないでよ？」

「アッ克斯3了解。なんとかなるっしょー」

応答とともに射撃を開始し、前方上空のクロスボウ1と撃ち合っているガンドッグ5の背部にレールライフルが直撃する。

「ダニーは伏兵を隠すための物でもあつたか……隊長、後方の伏兵三機より攻撃を受けています。援護頼めますか？ ある程度までは浮遊装甲を展開し、耐えます」

直撃は五発。

損傷判定は腕部と脚部にそれぞれ小ダメージ。

不意打ちに対して浮遊装甲5枚を非常に早く展開された結果、大したダメージは与えられなかつたようだ。

ガンドック5の通信通り続く後方からの攻撃は浮遊装甲で防ぎつつ、前方からの狙撃の一発を回避機動で避けていたが。

「動きが読めたよ。いただき！」

クロスボウ1の狙撃が更に避けようとするガンドッグ5を捉えた。撃たれたロングレンジライフルの弾丸はガンドッグ5が動いた先に置かれるよう放たれていたのだ。

「む、左腕に直撃か。損傷判定は中程度。もう一発今を貰えば破壊判定か。こちらの回避を予測して置き撃ちとは良い腕だルーキー」

こんな時にも落ち着いた声で冷静に分析している。さすがスナイパーをやつていいだけはある。

「5まだやれますか？ 今からそちらに向かい援護します」  
ガンドッグ2が背部への不意打ちを避けるために、ソードとクロスボウに対して機体を前に向けたままバックブーストで後退し、ガンドッグ5の方に離れていく。予定とは少し違つたが、これで敵五機を三つに分断することが出来た。

「ビッグハットよりランス！ ショータイムだ！」

「ランス1ラジャー。援護に向かう敵を狙撃します」

「ランス2ラジャー。敵スナイパーを落とします！」

これで落とせればかなり楽になるはずだ。

失敗した場合に備えての包囲戦術も準備してはいるが、敵よりも技量が低い部隊では、数が一倍でも不安なので確実に決めて欲しい。さてどうなる？ 息を呑んでモニターを見るとランス1が撃つた弾はガンドッグ2の右腰前面に直撃した。

ロックオン無しのスコープ射撃で警告音が鳴らす反応が出来なかつたようだ。

損傷判定は中程度だつたが、当たりどころが良く、戦闘に大きな支障が出るダメージではなかつた。  
しかし、足止めには十分だ。

「今のは一体どこから？ 被弾状況からして上からではなく正面か下といったところかしら？ まだ敵がいるの？」

続けざまにライフルが撃たれるが今度は粒子型シールドを展開し、弾の威力を殺して防御する。

「ふむ、やはり下からですか。2から全機へ11時の方向に敵スナイパー…こちらで捕捉したのでレーダーに表示します」

「マジかよ？！ 何体敵がいるんだつての！」

3機で4機を相手にしているガンドッグ4がうごぎりしたよつて叫ぶ。

その頃ガンドッグ5は器用に多方面の攻撃を防いでいた。

一番ダメージの大きいスナイパー方面に常に装甲を3枚展開し、ミサイルにはフレアを射出してそらし、レールライフルやマシンガンには2枚の浮遊装甲をピンポイントで当てて防いでいる。

だが、この攻撃の雨に近接戦闘の得意な機体が参加したことによりガンドック5の防御にほころびが生じた。

「いただく！」

ランス2がショットガンの連射により、浮遊装甲3枚を一点に集めたところに、背部ブーストを噴射し粒子ブレードを構えながら突っ込んだ。

初撃は横切りで浮遊装甲をまとめて払い空いたところにショットガンをつきつけ至近距離で発射するが、寸でのところでガンドック5が右手のロングレンジライフルをショットガンに払うようにぶつけ射線を変え回避、左手に粒子ダガーを取り、突きの反撃を繰り出しが、ランス2がバックブーストで突きを回避し、ショットガンを発射する。

ガンドック5はバックブーストが噴かれた瞬間にナイフを右腰にマウントしてそのまま左腕を盾にして、本体のダメージを減らす。同時に右手のライフルを肩に取り付け、空いた手でマウントされたダガーを投擲する。

ランス2は投擲されたダガーをショットガンにぶつけ直撃を防いだ。  
「ちつ、ショットガンが一本お釈迦になつたか！ それでも！」  
そしてショットガンに弾かれたダガーを掴み、そのまま投げ返した。ガンドック5はダガーの投げ返しに反応し、払われなかつた浮遊装甲を一枚ランス2に向け展開した。

しかし、そこから生じた隙をアックス三機によつて左右から狙われ、ライフルとミサイルを連続で撃ち込まれてしまつた。

左腕大破、脚部中破、右腕中破、コア損傷軽微、搭載されたAIから損害報告とアラート音が出ている。

ギリギリのところでロングレンジライフルと右腕を盾にしコアである胴体を守つたため撃破判定はまだ出ていなかつた。

「次で落とすぞ！頼むぞクロスボウ！」

ランス2は上からガンドック5の後ろに回り込み、クロスボウ1の砲撃に向けられていた浮遊装甲を右に弾き、追撃をせずにそのまま右にそれた。ガンドック5がカウンターの蹴りを入れようとしたがそのまま回避されてしまう。

「ナイスアシスト！ランス2！」

クロスボウ1の声とともに発射された弾丸はガンドック5の背部に直撃し、更にだめ押しの粒子ブレードの突きがコアに入つた。オペレーターの橋から撃墜報告が入る。

「敵機撃墜。次の目標に移つてください」

これでまずは一機。攻撃力の高い厄介な敵が減り、遠距離が大分楽になつた。

「こちら5、すまん。やられた。悔つていると痛い目を見る」

ガンドック5小隊に衝撃が走る。気付いたら敵が一倍の数になり、包囲されたあげく、味方機の撃墜により、戦力的にも精神的にも受けたダメージは大きい。

「了解。後は任せておけ。2はこっちの援護に戻れ！ 片側の敵を早く片づけなければまずい！」

「やれやれ。後ろに5を戻したのは失策でしたね」

「今更です先輩。それよりも後ろから撃たれるのが、一機だけで逆に良かつたかも知れませんよ。全機一片にスクラッシュは勘弁です」

「仇はとつてやるよ！ まずは田の前のやつらをぶつ潰す！」

ガンドック5はうまく損傷無しで撃破出来たが、前線の方は数が一機勝つているとは言いえ戦況は互角で、候補生達の機体に損傷が出ていた。

「ビッグハットよりアームズ全機！ 敵部隊は正面突破を図つているようだ。損傷のある機体は集中攻撃で落とされる可能性がある。損傷の少ないアックスとランスは速やかに援護に向かえ！」

「了解」

後ろに向けられる全ブーストを噴射し、全速で援護に向かう。

「橋、彼らが援護に入れるまでどれくらいだ?」

「後三十秒ほどです」

ガンドッグ2が残り10秒ほどで合流すると、中近距離の数は1対1になる。

タイマンで勝てる見込みは少ない上に数が減らされたら勝率はかなり落ちてしまう。そうなつてしまえば、ここまで作戦が全て水泡に帰す。

「ビッグハットよりソードおよびクロスボウ。アックスとランスが援護に入るまで約三十秒。援護が来るまで回避・防御主体で良い。絶対に落とされるな」

「了解」

海上や海岸の時とは違い、遠距離からの狙撃を含めて候補生達の数が増えて攻撃が激しくなつたので、ガンドッグ小隊の攻撃頻度が落ちるかと思ったが、頻度が落ちた分、三機の攻撃が集中し、回避と防御に失敗した瞬間に撃墜判定もしくは損傷大判定が下されそういうで攻撃されている。

そしてガンドッグ2が合流して更に攻撃は激しさを増した。

アタッカーミ機によるレールライフルとマシンガンで激しい弾幕をはりながら、ガンドッグ1による高速攪乱機動で上下左右前後と空間を最大に活かしてショットガンとアサルトライフルを撃ち込む。候補生側も、狙われた機体に一機援護が入り浮遊装甲を開け漏らした攻撃を防いでいる。

そして残りの一機で違う方向から射撃を撃ち込み撃墜を狙うと共に注意をそらして攻撃を一時的に止める。

大ダメージを狙えるスナイパー一機の狙撃は、レーダーから弾道の予測がつけられていたため、射線に対し機体の大部分が隠れるように浮遊装甲のマウント場所を変えて防がれていた。

スナイパー二人がそれぞれ驚きと共に打開策を相談する。

「どんなけシールドの扱い上手いのよ! さつきから何発も当てるのに全部シールドじゃないの!」

クロスボウ1にランス1が返事を返す。

「さすが正規パイロットですね。恐らくレーダーで僕達の場所を見て、そこから弾道を割り出してるのでは？」

「だったらどうすれば良いのかしら？」

「さつきの撃墜と同じで、隙を作つてもうつて確実につくつてのは？」

「今の状況を見ると難しそうね。近接攻撃しようと近づいたら蜂の巣にされて厳しいわよ。つてちょっと待つて！ さつき弾道予測で防いでるって言つたわね？」

クロスボウ1がどうやら何か思いついたらしい。

「そうだけど。それがどうかした？」

「ちょっと試したいことがあるの。今からロックオン無しのスコープ射撃は止めて全てロックオン有りで射撃するわよ。」こちらのロック状況を送るからリンクして、同時に時計回りでロングレンジライフルを連射しなさい！」

なるほど。悪くない戦術だ。試す価値は十分にある。」Jは静観しておこう。

クロスボウ1は上空からガンドッグ小隊の裏に回り込んでから、ガンドッグ4をロックオンし、ロック情報をランス1とリンクさせた。

「射撃開始！」

ロックオンアラートが鳴り、狙撃を事前に察知したガンドッグ4はほくそ笑んだ。

「馬鹿め！ 回り込んでの同時攻撃とはいえ、弾道予測が出来ている相手にロックオンとは当てる気があるのか？ まつ、ノーロックでも当たらんがな！」

自信満々の言葉通りマウントされた浮遊装甲で初撃は防ぎ、続く射線を変えながら撃たれる射撃には浮遊装甲を展開し、装甲を動かしながら弾を防いだ。

ランス1がクロスボウ1の戦術に気付いたようだ。

「なるほどね。でもこれ多分確実に決まるのは一回切りだよ？」

「一機確実に減らせるだけでも十分よ」

自信満々にクロスボウ1が答えた。

「それもそうか。タイミングは援護が到着した瞬間だね」

クロスボウ1がアックス3機とランス2に通信を入れる。

それも何故か色気たっぷりの声で。

「敵を一機減らす賭けにつきあつて」

## 第五章「包囲」

### 第五章「包囲」

援護が到着した頃、ソードとクロスボウ2は機体の損傷が中程度でまだ保っていた。

機体の性能もあるだろうが、訓練の結果でここまで出せるようになつているのは間違いない。

素人や練度が不足している者が正規パイロット相手にここまで出来る訳がないのだ。

そして、到着と同時にクロスボウ1より戦術が告げられた。

「クロスボウ1より全機！私のロックオン情報を送るからリンクして。今から私とランス1が狙撃で敵の浮遊装甲を時計回りに動かすよ。空いた隙間に全弾丸を撃ち込んで！」

全機のFCSにロックオン情報を送信し、準備が整ったのを通信で確認する。

「よし、全機クロスボウに続くぞ！」

アームズ全機がクロスボウ1の戦術に参加する。

まずはスナイパー二機が時計回りに狙撃を始めた。

ガンドッグ4は浮遊装甲を展開し、射線に応じて装甲を時計回りに動かす。

「だから何度やっても無駄だつての！」

何回か同じ動きをして慣れさせたせいもあり、ガンドッグ4は完全に戦線に参加した四機のことを忘れていた。

右後ろと左前に隙間が生まれたのをクロスボウ1は見逃さなかつた。

「撃ち方始め！」

敵機に狙われていた一機と援護に入っていた一機をのぞいた全八機からの集中砲火が始まる。

「ちつ！ しまつ……」

ガンドッグ4が撃墜を覚悟したところに新たな装甲が周りに展開され攻撃を防いだ。

「4油断しそぎ。レーダーをしつかり見て」

ガンドッグ3が自らの浮遊装甲をガンドッグ2に飛ばしていたのだ。装甲のやりとりが出来る浮遊装甲の長所を活かしている。

「助かつたぜ。今のはちいとひやつとした」

だが、浮遊装甲を味方に飛ばすことは自分の盾が無くなることと同じだ。それをクロスボウ1は見逃さなかつた。

「浮遊装甲を飛ばした！？ ランス1、丸裸のやつを落とすよ！」ロックオン機能をオフにし、スコープ射撃でガンドッグ3に連続で弾丸を放つ。

初撃は右肩に、続く射撃で胴体に連続で入つた。コア損傷による撃墜判定だ。

橋からの撃墜判定が報告される。

「油断したのはボクか。みなさん後は頼みます」やはり抑揚のない平坦な声音で報告をする。

二機を撃墜したことによって勝利に近づいているが、ここで油断してはならない。

私の方も敵の動きを見落とさないよう注意深くモニターを見つめる。

「やるなルーキー。だが、ここまだだ！ フォーメーションファング！」

ガンドッグ1がブーストの出力を上げソード1に肉薄し、右腕の粒子ブレードを上から振り下ろした。ソード1が左手の粒子ブレードで斬攻を何とか受け止める。

一瞬のつばぜり合いの間にソード1が右腕のショットガンで狙いをつけるが、ガンドッグ1はショットガンの構えを見た瞬間に射撃が来ることを察知し、粒子ブレードを解除して、下に回り込んで回し蹴りをソード1の背中に入れる。

バランスを崩したソード1は体勢を立て直すため上空に離れて距離

をどううとするが、予測されていたかのようにガンドッグ2と4が背面にいた。

「さすが隊長。最高の攻撃ポイントです」

「マシンガンが2機から斉射される。

「ちつ、させるか！」

二機からの攻撃に対しギリギリで浮遊装甲を展開し、数発の被弾で済ますことは出来た。

しかし、正面からの攻撃はまだ続いていた。ソード1はブレードを構え直し、接近して来るガンドッグ1を迎える。

初撃の袈裟切りをまたブレードで受け止めた所、ガンドッグ1が左手にダガーを持ち、突きを繰り出す。

ソード1は繰り出された突きを防ぐため、背面からの射撃に被弾覚悟で浮遊装甲を前面に移動させたが、突きはフェイントで、つばぜり合いをしているブレードを下げる変わりにダガーでソード1のブレードを抑える。

「なっ！？ 突きじゃない？」

そしてその一瞬に、下げるブレードで下からの切り上げをソード1の左腕に直撃させた。

「おいおいおい！ なんだそれ？！」

完全な直撃を受け、左腕の破壊判定が出されたため、ソード1の粒子ブレードの刃が消えてしまった。

「おいおい、まじかよ？！」

空いた左側からブレードの突きによる連撃が繰り出されたが、機体を右にひねり、まだ破壊判定の出ていなかつた左肩に当てる。

「ほお、今のは防ぐか」

ガンドッグ1は少し嬉しそうにつぶやき、既にショットガンに持ち替えられていた左腕武器のトリガーを押した。放たれた散弾が浮遊装甲にあたるが、この一連の攻撃でソード1は後ろの警戒がおろそかになってしまった。

「ソード1！ 後ろだ！」

誰かからの通信が入ったころにはガンドッグ2と4が格闘距離に入りダガーで突きを放っていた。

「2、4、よくやつた」

「隊長！ 次もたのんますよ！」

コアにダガーの直撃判定が下り、だめ押しの零距離射撃まで加えられたソード1に撃墜判定が出る。

「すまん。やられた」

ソード1が味方に撃墜された報告をする。

「大丈夫だ。後は任せろ」

初めての撃墜に動搖するかと思ったが、ソード2の応答をはじめ、皆落ち着いていた。

これは私も負けてはいられないな。落ち着いてレーダーを見るとあることに気がついた。ソード1、どうやら君の粘りは無駄ではなかつたようだ。

ソード1の奮戦により敵の配置がアームズの丁度真ん中に位置していたのだ。

ここが決め所と判断し全機に通信を入れる。

「ビックハットよりアームズ全機。敵は一力所に固まっている。このまま包囲して一機に攻撃を集中させる。こちらでガイドを出す」

「了解」

アームズの応答を確認して、橋にガンドッグ1にマークを入れてもらつた。

全機のレーダーにターゲットとしてガンドック1に重要ターゲットのマークが映し出される。

更に近接攻撃をしかけるファイターの映像を小窓でスナイパー二機表示させた。

クロスボウ2とアックス三機による援護射撃の中、残ったファイターのソード2と3、そしてランス2が牽制射撃を入れながら接近し、スナイパー二機はガンドッグ2と4の注意を引きつけるための射撃を始め、少しづつガンドッグ1を他の機体から引きなした。

数秒後、接近戦が推奨される距離にまで近づきそれが粒子ブレードを展開する。

「三機相手か。さて……」

左右と後ろからのブレードを浮遊装甲それぞれ一枚で受け止め、払うようにブレードを横に一回転しながら振つて反撃する。

候補生達は脚部のブーストの出力を上げて上に切り払いを回避し、三機同時にブレードで切りかかるが、振り下ろした腕に浮遊装甲がぶつけられ体勢が崩される。

よくもそこまで上手く装甲のコントロールが出来るものだ。

「まずは一機」

ガンドッグ1のブレードによる突きがソード2に向けて放たれる。

「まずつた！」

腕が後ろに反り返つていたためコアである胴体ががら空きだつた。そこを確実に狙われている。

しかし、スナイパー一機に前衛のモニターを表示させておいたのが功を奏した。

「ソード2！ 貸しよー。今度はんおじつてね？」

ガンドッグ1が浮遊装甲を相手の体勢を崩すのに使つていたため、防御力がダウンしていた事に気づき、モニターから危険を察知して、とつさにガンドック1の右腕を狙つて狙撃したのだ。見事に右腕に直撃し破壊判定が下された。

「ほお、やつてくれる」

ガンドック1の感想通り、本当によくやつたと言わざるを得ない。判断力、射撃能力が高くなれば出来ない芸当だ。

ガンドッグ1はブレードが使えない状況で接近戦は出来ないと判断したのかバックブーストで距離を離しながら、浮遊装甲を引き戻そうとする。

「ここで逃すわけにいかないわよ！」

前衛三機が再度突撃をかける。

一方ガンドッグ2と4はアタッカー四機によつて足止めをされてい

た。

「隊長！ ちひ、 じいじううとうじいぞ！ うびうにかしろー。」

「じつちがどうにかして欲しいくらいですよ。さすがに1対4は厄介です」

「おい、俺を数から外すな！ 仕方ねえ。被弾覚悟で近接攻撃をしかけて突破するしかないか！」

「本当に仕方ないですね。あなたの頭の悪い作戦につきあいましょう」

「だから、誰の頭が悪いってんだよ！？ いくぞ！」

ガンドッグ1がいる方角には現在アックス2と3が応戦していて、この2人が少しでもガンドック2とガンドック4を抑えられれば、反対側からアックス1とクロスボウ2で挟むことが出来る。とりあえずは静観だ。

一方ガンドッグ1の方は左腕一本で上手く対処しているが、いくら正規パイロットとは言え片腕だけで三機を相手にするのは大変難しいようで徐々に押され始めていた。

「スナイパー！ 浮遊装甲はこちらでぶつ飛ばす！ 空いたところを撃ち抜け！」

ガンドッグ5を撃墜した戦術をランス2が提案する。

「「了解」」

展開されている浮遊装甲は六枚。それを敵の方面に合わせて展開している。

1人1枚プラス1で各方面からの攻撃をしのがれていた。

この状況で浮遊装甲の無力化は大きなチャンスになる。良い判断だ。

「さすがに、厳しいな」

ガンドッグ1は味方の援護がレーダーを見る限り、足止めされて期待出来ないと分かっていたのだろうが通信を入れて確認をとる。

「2、4。少し状況が悪い。援護に来られるか？」

「今何とかします！ 待つてて下さい」

「了解」

ガンドッグーはロックアラートが鳴り響くロックピットの中で一度深呼吸をして敵の攻撃に再度集中したようだ。

次で決まるか？と私にも緊張が走る。

3方向からの斬撃を浮遊装甲で防いだが、これは候補生達の予定通り。

そのまま防いでいる装甲を横に弾き飛ばし、残っている三枚の装甲にそれぞれがもう一度攻撃をしかける。

「ちっ、まずいな」

ガンドッグーは浮遊装甲のコントロールを捨てて高度を一気に落とした。

装甲をはじかれた時に狙撃が来る事を予測し、ガンドッグーの舞は回避する事ができたようだ。

「さすがに警戒されていますね。でも、丸裸な状態でいつまで逃げ切れますか？」

一発一発と何発もの狙撃をかわしながら、ゆっくりと落下している浮遊装甲の近くに飛び、コントロールを復活させるつもりでいるようだが、前衛がコントロール距離に近づくとショットガンを放ち、何とか体勢を立て直さないように牽制する。

「しぶとい。しぶと過ぎるわ。どんな腕してるのよ……」

呆れるようにソードーが呟いている。

「ほんとよね。足さえ止まれば当てられるんだけど。なんのあれ

？ 動き過ぎよ」

先ほどから何発もの攻撃をブーストの出力を調整しながら自由自在に上下左右に動き回り、攻撃を避けられているクロスボウーも困惑していた。

既にお互いの姿を見せ合っている状態の戦闘に関して、指揮官がしてやれることは少ない。

有利な状況は作れるが、そこから先は個人とチームの能力が決め手となる。元パイロットとしては非常にもどかしい。

彼らはこの状況を開ける能力があるだろうか。

「ちょっと賭けをやるか。わしがの借りを返すぞ。そんでもって、おごりは無しだ。」

ソード2が何やら思いついたようだ。

「何するつもりよ?」

「敵の浮遊装甲をハックしてぶつけるからその隙を狙い撃て」

ランス2がその提案に割ってはいる。

「おい、その機体でハックキング出来たか?」

ランス2が言つた通り、今回機体に電子戦用の装備はついていない。一体何を考えているのか私にも予想がつかない。

「だから分の悪い賭けなんだよ。ってことで頼むわ

「何だがわかんないけど、その賭け乗つたわ」

ソード3はガンドッグ1が浮遊装甲近くに行けるよつわざと射撃を外した。浮遊装甲がコントロール距離間近になつた時、ソード2が急接近し、浮遊装甲を左手で掴み装甲に沿つよつてブレードを持った右手を添え、ブーストの出力を上げた。

「浮遊装甲は返すぜ! ただし、ブレードのオマケ付きだ!」

「それハツキングじゃねえ!」

ランス2が大声でつっこみを入れた。

面白いことを考へる奴だよ。私にはまったく思いつかなかつた戦法だ。

吸い寄せられるよつわざでガンドッグ1にソード2が突撃する。

「面白い!」

ソード2の突撃に対し、ダガーによるカウンターを入れるため、ガンドッグ1が一瞬止まつた。

「あら残念。ご飯楽しみだつたんだけど、これでチャラかしらね?」  
一瞬の隙をクロスボウ1がつき、狙撃がガンドッグ1の背部に直撃した。

ガンドッグ1が舌打ちをする。

「本命はそちらだつたか。なるほど、良いチームワークだ。だが、タダで落とされてはやらん

右肩をソード2の突きに直ら当てに行き、左手に持っていたダガーを落として左足で蹴り上げた。蹴飛ばされたダガーがソード2の右足に命中する。

同時にソード2の粒子ブレードがコアに届き狙撃とブレードのダメージによる「ア損傷の撃墜判定が下された。

「やれやれ最後のを脚部を使ってコアを防ぐとは。思った以上に反射神経が良いじゃないか」

大きなため息を一つつき、味方に連絡を入れる。

「こちらが Gandrig 1。すまんな。落とされた」

近距離戦闘に持ち込んでも、なかなか突破出来ないでいた最中に、隊長機から落とされた報告を入れられて2人は衝撃を受けた。

「すみません。こちらが手間取ったばかりに」

「隊長落とされたってマジっすか？！」

「マジだから困る。2も今は気にするな敵に集中しろ」

Gandrig 1を失つて現在の戦力差は2対9。

圧倒的に候補生達が有利な状況になつた。だが、ここで油断してはならない。

少しの気のゆるみが実戦では死につながる。

「ビックハットからアームズ全機。残敵は2だが、決して油断するな。こちらからターゲットマークを出す。集中して撃破しろ」橋にターゲットマークを Gandrig 2につけよう指示し、全機に送つて貰う。

「みなさんにターゲットマークを転送しました。確認してください」

全機の攻撃が Gandrig 2に集中し、接近戦をしかけられているアーチクス2機から引き離した。

代わりに候補生のファイター三機が近接攻撃をしかける。

「私に攻撃を集中させますか。まずいですね……何か手は」 Gandrig 2が粒子シールドを全方面に最大出力で展開し射撃を防ぎながら手を考える。

射撃を防げてはいるが、足を止めてしまつてはいるので、チャンスと  
思つたソード2がブレードを構えて突撃していく。

「やはり、突つ込んで来ますか」

ダガーを右手に構えて袈裟切りを受け止める。

粒子シールドは銃撃戦には強いが格闘武器にそこまで強くないのだ。  
あくまで、粒子によつて運動エネルギーの置換をしているだけなの  
で、力が加えられ続けたり、粒子が放出され続けるような攻撃は防  
ぎきれない。

その短所をよく理解してのダガーによる防御だ。

ただ、一機は防げたものの続く一機は防ぐ手段が無い。

それを見越してソード3が切りかかる。

「トドメは任せてよ」

しかし、ブレードが当たる直前にソード3がガンドック4に体当た  
りをもらい押し戻された。

「よう、無事か？」

「おかげさまで何とか」

ガンドック2は返答をしながら、つばぜり合いをしているソード2  
に蹴りを入れ吹き飛ばし銃撃で距離を離させ、ガンドック2機が背  
中合わせで候補生と向き合つ。

「そう思うなら今度から俺の扱いを良くしてくれよ?」

「あなたがここにいる敵全機を落としたら考へてあげます」

「お前それ微塵も改善させるつもり無いだろ?……」

両者ともに鼻でふつと笑い合い操縦桿を握りなおした。

「私が半分以上落とすのでね。残念ながらあなたは私以下ですよ」

「ハツ! 言つてくれるぜ。俺に負けて悔しがるが良いさ!」

言つと同時に2人が散開する。

友というよりライバルなのだろう。そういう仲の良さも張り合つが  
あつて楽しそうだ。

緊張感や絶望感を紛らわせる良いコミュニケーションになる。

どうやら隊長機が落とされた精神ダメージからは回復していくよう

だ。だが、ここで分散するとは失策以外の何でもない。

候補生が再度包囲と近接攻撃をしかける。

「今度こそ落とすよ！」

ソード3が最初にガンドック2に横切りをしかける。

ガンドック2はバックブーストでそれを回避し、振り向きながら左手のレールライフルを後ろから来たソード2にぶつけ、上からのランス2の斬撃をダガーで防いだ。

「つ！ ライフルは鈍器かよ！？」

面食らいながらも体勢を立て直し、避けられたソード3と共に再度切りかかるために接近する。

ガンドック2はこれに対し、高度を一気に下げることで相打ちを狙うが、三機とも反撃に備えながら接近していたので、反応して射撃による追撃を入れることが出来た。

三機からのショットガンとアサルトライフルによる銃撃が連続で近距離から当たり、「ア損傷による撃墜判定が下された。

「やれやれ、私もまだまだでしたか。4良いとこ見せてくださいよ？」

「あー……何だ？ わりとマジに言つが、これ詰んでないか？」

戦力差を考えれば普通勝てる見込みが無い状況だ。

援軍が期待出来ない中での1対9で勝てたら教科書に載せられる。

「主人公なら主人公補正で何とかなりますよ？」

ガンドック2が悪戯っぽく笑いながら言つと。

「俺この戦いが終わつたら告白するんだ。花束も用意してあるんだよ」

「それ、死亡フラグですよ」

ため息をつきながらガンドック2がつっこみをいれる。

「頑張つてくださいよ。ひっくり返したらほめてあげます」

ガンドック2は通信を切つて、もう一つ溜め息をついて観戦モードに入る。

「みなさん敵は残り一機です。油断せず攻撃してください」

橋の通信が入り、残ったガンドッグ4を9機で包囲し、一斉射撃を続ける。

ガンドッグ4は防御と回避が間に合わず、被弾が増えていった。機体に搭載されているAIが警告を発する。

「げ、サブブースター被弾で出力ダウンだつて！？ 勘弁しろつての！」

動きが鈍り、更に攻撃が畳みかけられた。

「あー、くそつ！ やられた！」

反撃はしたが、撃破には至らずガンドッグ4は撃墜判定が下された。これで、戦闘は終了だ。

「橋。アームズ、ガンドッグ全機に訓練終了の連絡を入れてくれ」「了解。訓練参加の全機へ。訓練終了です。繰り返します。訓練終了です。基地に帰還してください」

撃墜判定が下され待機していた機体も含めて全機が返答を返した。

「「了解」」

## 第六章「警備打ち合せ」

### 第六章「警備打ち合せ」

基地に全機が帰還し、評定を下すためにブリーフィングルームに集合してもらつた。

「皆揃つたようだな。訓練、」苦労だつた。双方ともに良く動いていたが、今回の結果に満足せず、次はより高みを目指せ」

「「イエッサー！」」

さて、まずはガンドッグの方から総括しよう。

「さて、気付いていとは思うが今回は色々とハンデをつけでもらつた。どのようなハンデだったかガンドッグー分かるか？」

ガンドッグーが期待通りの答えを返す。

「はつ！ まず一つに数です。次にジャミングによるレーダー障害とバックアップが無かつたこと。最後に恐らくですが、作戦指揮がとられていたことです」

「よく三つ目が分かつたな」

これは戦闘中に相手の動きを見ていなければ分からぬ要素のはずだ。しつかり見抜けていたかと感心する。

「指揮官がいない状態で、戦闘に参加している人数が多くなればなるほど統率は乱れやすくなります。しかし、統率がとれた動きでこちらを追いかけてきたので、恐らく指揮官がいると考えました」

「なるほど。部隊長として良く観察しているな。だが、ハンデはもう一つあるぞ」

そう通常の作戦行動ではまず起こりえないハンデがある。

「何でしうか？」

「君達の作戦も通信も全て候補生側に漏れていたのだ。指揮官にとって部隊を下げるタイミングと攻めるタイミングが見極めやすい状態になつていた」

ガンドッグ一同がなるほど。と頷いた。

ガンドッグ1が続けて疑問の解消を進めようとする。

「では今回の作戦指揮をとつたのはどなたでしょうか？」

知つたら文句の一つでも言われそうだな。と心の中で苦笑いをしながら答える。

「今回の指揮官は私だ」

「大佐？！ つてそれ簡抜けどこりの話じゃないつすよ！ 」 じつちの作戦出したの大佐ですよ！？」

ガンドッグ4が驚きのあまり大声でつっこみを入れるがガンドッグ1が制止する。

「落ち着け。しかし、大佐が指揮官なら納得です。となると前半の陽動も大佐の作戦ですか？」

通信を聞いていたので、彼等が陽動に気づいていたことを知つてゐるし、警戒していたことも知つてゐる。

もし、正しい対応をとられていたら候補生が負けていただろう。

「その通りだ。君達の分断と不意打ちは私が提案した作戦だ。陽動だとは君達も気付いていたようだがな」

「なるほど。見事な采配でした。正しい対処が選べなかつた我々もまだまだ未熟ですね」

ちらつとガンドッグ4を見ると拗ねたような顔をしていて、他のメンバーも少し悔しそうな顔をしていた。少しふオローを入れておいてやろう。さすがにハンデ有りとは言えルーキーに破られたのはシヨックだろう。

「単騎の能力なら君達の方が上なんだがな。複数相手は苦戦しただらう？」

「そうですね。なかなかの腕でした。将来が楽しみです。」

ガンドッグ1から評価されたといつとはボーナスも出して良さそうだ。

「では、訓練の録画データを各員の端末に送信しておく。レポートを今日中にまとめてこちらに送るように」

「「了解」」

次に候補生の総括だ。

「候補生諸君良くやつてくれた。先程の話にもあつたが、君達は圧倒的に有利な状況で戦つた。今回の結果で浮かれず、対等もしくは劣勢な状況でも勝てるように、いつそ訓練に励んで欲しい」

「「イエッサー！」」

そして次にブリーフィング時に言つたボーナスについて伝えなればならない。

「さて、ジャマー施設防衛ボーナスに関してだが」  
わざと言葉を切ると皆そわそわし出した。やっぱ気になるんだな。  
候補生がこちらに熱い視線を送つてきている。

「君たちの今回の戦績を加味し、正規パイロットの内定を出そう」  
候補生達は一瞬ポカんとし、数秒後に状況を理解したのかガツツボーズをとつたり抱き合つたりし出した。

「あー、諸君静かに。続きがある」

とりあえず、彼等を落ち着かせる。

そして、ざわめきが收まりじつとじあらを見つめている。

「ただしだ。正式配属までに訓練をおこなり成績を下げた瞬間に内定を取り下げる。分かったか！」

「「イエッサー！」」

結局のところ正規課程は全て受けて貰うが、実技審査はこれで実質パスだ。

残り一ヶ月も候補生として訓練に頑張つて貰う。

しかし、内定が決まつてはいるからといって、これから手を抜いて腕を落とすような奴なら、そんものは戦場に出せない。

「では候補生諸君も今回の訓練について、レポートを今日中に提出したまえ。田口軍曹後は任せたぞ。では解散！」

全員が敬礼をし、ブリーフィングルームから退出していった。

これで午前の主な仕事が片付いた。

時計を見ると11時近くになつていたので、一度リフレッシュルーム

ムに行つて少し休憩をとらうと考へたが、第三世代マップスの申請書が送られてくることを思い出し、携帯端末からメールをチェックした。

なんと既にオヤジさんから送信されていた。ただありがたいことに、既にある程度申請書が埋められている状態だった。

「そこまで量が無さそうだし今のうちにやつておくか

後々書類の山に埋もれるのは変わらないだろうが、山は小さい方が楽なのでやれるうちにやつておきたいとは思つ。

ただそれでも……。

周囲を見渡し周りに誰もいないことを確認して溜め息をついたら、つい口に出してしまつた。

「やはり面倒くさい……」

携帯端末をしまい佐官用の個室に戻り申請書をの空欄を埋めていく。最初は面倒だと思っていたが、記載されていた第三世代のスペックが思つた以上にハイスペックで実物を見るのが楽しみになり、やる気が多少湧いてきた。

第二世代になつた時も驚いた物だが、今度のはまたすゞかつた。

パイロットとして乗れないのが少し残念だ。

ちなみに海外の同盟国マップスマーカーは第一世代型の基礎フレームを菱田重工から輸入し、それぞれの国に合わせたカスタマイズを行つてゐる。

独自にフレームを作りとする動きもあるようだが、菱田重工のフレームに劣つていたり既存パーツとの互換性の問題やコストの問題で実用化されてない。

一方で、輸出が禁じられている敵対国でも近年マップスが生産されているが、設計はろ獲した機体からの「テッドコピー」で、基本的に第二世代型と同じようなフレーム構造となつてゐる。

将来どうなるかは分からぬが、現在はそのような状況なので、基礎フレームの開発が出来るのは菱田重工だけなのだ。

その菱田重工の最新機を模擬戦による性能試験とデータ収集のため

だけとは言え、どこよりも早く使えるのはここだけなのだ。  
楽しみにならない訳がない。

20分程で一次申請の書類を完成させ本部に送信する。  
更に開発者である菱田重工技術顧問の松平にもメールを送信してお  
く。

第三世代フレームの視察日時についてと詳細を開発者から聞いたか  
つたのだ。

メールを送信して時計を確認する。

「昼休憩まで後30分か。時間まで、午後の会議資料を見直してお  
くか」「  
机の隅に置いてある国境資源会議の警備資料を手にとりめぐつてい  
く。

場所は首都ニアヤトの国際会議場。

時間は1000から1500までの予定。

会場と都市圏は警察が担当し、郊外を軍が警備。  
軍で警備にあたるのは首都から一番近い位置にあるオーカシス陸軍  
基地の部隊。

国境近くの基地はレトリア連邦警戒のために部隊を展開しながら待  
機。

南方の空軍と海軍は緊急出動が出来るように待機しつつ、数部隊そ  
れぞれから派遣するように通達が来ていた。  
ある程度派遣する部隊数は決まっているが、今日の会議で最終決定  
する予定となっている。

そして次に書かれている一文が、わざわざ警察だけでなく軍まで警  
備に回している原因なのだろう。

「テロリストによる破壊工作の可能性あり」

毎度毎度のことなのだが、FTT技術の普及とともに様々な既得権  
益を破壊してきた。

その過程で、レトリア連邦の資源所有権主張もその一つになるのだが、主に化石燃料を輸出していた旧資源輸出国で、反ヤボネ团体や

反FTE団体が生まれ、紛争やテロ行為が幾度か行われてきた。

おかげでこういった国際会議の場で気が抜けたためしがない。

そのままページをめくつていき続きを見ていたら、突然携帯端末の

着信音がなった。

番号と名前を見ると菱田重工の松平からだった。

警備資料を置き電話に出る。

「もっさん久しぶり！」

やたら元気の良い声だ。

自分より年上の33才で、菱田重工マップス部門技術顧問でマップスの機体から武器まで様々な分野で開発をしている変態技術者だ。

「元気そうだな松平。どうした突然？」

確かにメールは出したが電話で来るとは何かあったかと思ったが。

「もっさんが新しい子の紹介してつて言つから電話の方が早いかなつて」

そういうことか。メールの方が見返せてありがたいのだが、また送つて貰うことにして。

ちなみに彼は自分が開発に関わったマップスの事を人扱いしている。

「そうか。ならいくつか聞くが、カタログスペックを見たところ大

分第一世代型から大きく変化しているな。互換性はあるのか？」

「一応あるけど、ほとんど意味が無いよ。彼女の全力が見たいなら彼女用にカスタマイズされた第三世代用のパーツと服じゃないと。ライフルとかのアクセサリーに関しては互換性が余裕であるけどね。

「

さらに言つと女の子扱いで各種装甲は衣装。武装や各種パーツはアクセサリー扱いで、これが変態扱いされる原因だ。

「後この予定されている各種追加装備の超高速強襲装備つてなんだ？」

「それはすごいよ。新しい子専用の新衣装！ 最速のおでんば娘

つて感じ！」

説明をしたくてたまらないと言つてているような声だ。少し長くなる

ことを覚悟する。

「どういふことだ？」

かいつまんで説明すると背部に大型の追加ブースター・ユニットを取り付けて超高速で移動できるものらしい。

しかも、オプションで武器コンテナ・ミサイルポッド・ロケットランチャー・爆撃コンテナ等が追加出来るようになつており、超高速で接近し最大火力で敵施設を制圧する運用が出来るとのことだ。また攻撃性能だけでなく、高速移動中の防御性能も向上させており、補助アームを使用してのシールド操作により高速移動中でも浮遊装甲の操作が可能となつていて、

甲の操作が可能となつていて、

正直相手にしたくない。

「で、こいつに弱点はあるのか？」

「近距離戦は苦手だね。さすがに機動性まで確保は難しかつたよ。脱げば良いんだけど、ちゃんと回収しないと大変でしょ？だから基本的に脱げないんじゃないかな。」

生産コストを考えると確かに簡単にページ出来るものではない。それに敵に新装備をろ獲されるとまずい。

なるほど、確かに近距離が弱点だ。

「これ戦闘中に付け外しを自由に出来ないか？」

「やっぱそれ聞くよね。只今研究中の課題で、まつ、そのうち出来るようになるよ。ちなみに簡易版の追加ブースターだけならアクセサリーとして第一世代型でも使えるから良かつたら使ってね」

仕事が増えるが戦闘において足の速さは重要な要素だ。採用する価値は十分にある。

そして何かを思い出したように松平があつと声をあげた。

「後そうだ。ずっと前に君の所で試験してもらつたダガーとブレードのオプションパーソのことなんだけど、無事申請が通つたみたいで発注が来たよ。初回生産分は北の国境行きだけど、来月末の会議前には余裕で君達の所にも行くはずだよ」

「ほお、あれはうちの連中からも評判が良かつたからな。楽しみに

待つていいよ！」

良くダガーやブレードは投げたり弾かれたりして手から離れるので、回収用のワイヤーを付ける試験をしたのだ。

武器ではないので簡単に申請が通ったから良かつた。

「あれはなかなか良いアクセサリーだよね。ポイ捨てなんてはしないことを、うちの子にはしてほしくないからね。まつ、今はそれよりもっと凄いもの作ってるけど。つてことで試験用のを一緒に送るからまた頼むよ」

これでまた仕事が一つ追加。思わず頭をかいてしまった。  
この話で性能試験をしたライフルをふと思いつ出したので、ついでに聞くことにした。

「それは楽しみだが、あのライフルといつて良いのかも分からんあれはどうなった？」

「ふふふ、勿論データを貰つてから更にすこくなつて完成してるよ。そろそろ採用の通知が来るかな？ 今度おまけで正式版と一緒に搬入させるよ」

自信満々の声でライフルの出来を保証している。あの化け物ライフルが正式採用されるのか。送つてもらえるのは確かに助かるが、一体どう使えば良いんだ？ あのロマン武器……。

その後も新装備や新機体の情報をもらこと長こと話をしてしまった。

そろそろ食事に行つてくると松平が話を終えようとした時に気に入ることを言つて残した。

「そういえば技術者仲間から聞いたことなんだけど、どつかで最近大型のFT-E兵器が出来たとかなんとか。まあ、うちの子たちが負けるとは思わないけどね。んじやまた」

「ああ、またな。メール頼む」

時計を見ると12時半を過ぎていた。

こちらも昼食を取りに食堂に向かおう。

多分、賭けの結果が公開されて賑わつているのも終わる頃だらう。

と思つたが、食堂につくとまだ混雑していた。

モニターの前では賭けの配当金が配られていたが、そろそろ行き渡つたためかその周辺に人は少なかつた。

食堂の所々から賭けについての議論が聞こえる。

レーダーが死んでいる状態での待ち伏せの対処などを議論しあつてゐるようで、今回もこの賭が良い教材になつたようだ。

カウンターまで行くと食堂のおばちゃんに声をかけられた。

「お、もつちゃん来たねー。今日の話題は全部あんたがかつれいひててるよ。で、今日は何にする?」

おばちゃんに階級は関係無いのだ。

特別扱いされないのは基地内では珍しいので悪くない。

何にしようかとメニューを見ていたら、金曜日のカレーフュアをやつていた。

「そうだな。カレー辛口とミネストローネのセットを頃こいつ

「はいよー。ちょっと待つてね」

盆にカレーとスープそしてサラダが置かれ手渡された。

香辛料の香りが鼻腔をくすぐり、スープの鮮やかさも食欲をそそる。サラダにドレッシングをかけて空いている席を探すと、田口軍曹の隣がたまたま空いていたので隣を失礼することにした。

「田口軍曹、隣は空いているかな?」

声をかけると田口軍曹が体ごとすくい勢いでこちらに振り向いてきた。

「大佐殿? ! もちろん空いております」

お盆を置き席につく。

「しかし、佐官がこのような所でお食事とは。自室の方が快適ではないのですか?」

「こひついう賑やかな場所は昔を思い出して好きなのだよ。いただきます」

手を合わせてから食事を始める。

「大佐殿がそうおつしやるなら、ただ佐官としてやはつこにこる

のは少しふさわしく無い気がしますよ」

相変わらず眞面目な男だ。

それにしても今日の食事も美味い。

甘さ酸味塩味が良いバランスで成り立つており、そこに溶け込んだ  
具材の味がより深みを持たしている。

そして鼻に抜ける香辛料の香りと舌への刺激が次の一口を勧める。  
一緒にってきたミニストローネも野菜の甘みがよく溶け込んでおり、辛口のカレーと実に相性が良い。

うん、今日も食事が美味い。

食事は士気を維持する上で最重視される一つの要素だ。

不味い食事はそれだけで士気が削がれる。美味しい食事はそれだけで  
心が踊る。栄養価の方も不足しがちな野菜類を細かく碎き料理に混  
ぜ込んであるので、身体にも良い。

おばちゃんの旦那であるシーフの腕には感謝してもしたくないくらい  
だ。

舌鼓をうつていると田口軍曹から模擬戦について話題を振られた。

「今日の模擬戦さすがでした。おかげで儲かりましたよ」

ハンデありとは言え、正規組に勝てたのは私の力ではなく、軍曹の  
訓練のおかげである。指導の礼を伝えねばなるまい。

「いや、私は何もしていないよ。君が候補生達を鍛え上げてくれた  
おかげだ。ありがとう」

軍曹は椅子から立ち上がり深々と頭を下げた。

「光栄です。残り一ヶ月で更なる力をつけられるよう鍛え上げてみ  
せます」食事時くらい気楽にしていて欲しいと苦笑して、座るよう  
に促して話を続ける。

「他の基地に配属になるやつも多いだろうが、残つて貰いたい候補  
が何人かいるな」

候補生から無事正規パイロットになれば各基地に異動する。

その中で何人かはこのまま残るのだが、ある程度こちらの希望が通  
るらしい。

ガンドックの3から5のメンバーはそれでこの基地に残せた。

「今日の訓練だとクロスボウの武田ですか？」

さすが指導しているだけあってよく分かっている。

「正解だ。あの狙撃の腕はなかなか良い。それにソード2の伊東。ブレードの戦術は面白かった」

今日の模擬戦の戦いつぶりを思い出しながら伝える。

「確かに。ですが、今日の模擬戦に参加していない者も良い腕を持つています。決定にはこさか早計かと。」

そもそもそうかと思い、他の候補生の話を詳しく聞きながら昼食を食べた。

話を聞いていると、どうやら候補生五十人の特性を全て把握しているらしい。

本当に教官が向いている男である。これは現役パイロットを引退させて教官職につかせるべきなのではないかと真剣に悩んでしまつ。今度の候補生が卒業するころにでも意向を聞いてみよう。

食事を済ませて個室に戻り、会議の最終準備に入る。

資料をまとめてファイルに詰め、ノートパソコンとお茶の入ったペットボトルを会議室に持つて行く。

書記の係りが、モニターを起動し、こちらのカメラも起動させる。時間の一時になると一斉に参加者の顔が映つた。

警察・陸軍・海軍・空軍のトップに警備に参加する基地のトップが揃い踏みだ。

特例で大佐に昇進した身にとつてはこにこるのが何度やつても場違いであるようを感じる。

丸顔に無数のしわが刻まれた顔の人人が警察庁長官で、今回の打合せの議長を務めている。彼の低く重い威厳のある声により打ち合せが始まる。

「諸君全員揃つたようだね。では今から国境資源会議の警備打ち合せを始める」

手元のモニターに首都の地図が表示された。

碁盤目上に区画が整理されている都市でその中央付近に国際会議場がある。

「事前に配付した資料通りの編成で警備にあたる。国際会議場付近は我々警察の特殊機甲部隊が警備にあたる。警察仕様にカスタマイズされたマップスを東西南北500mに2機ずつ、会議場正面に3機、背面に3機、左右側面に3機ずつ。計20機を配置する。また場内にもテロ対策部隊を50名配置する。これで会議場付近は万全でしょう。また市内には検問所や私服警官を配置し、不振人物を発見し次第確認していく。市内の方はこのような形で依存無いかな?」

警察庁長官が確認を要請する。

「とりあえず、今まで通りの布陣で文句のつけようがない。

他の参加者も頷いている。

「では次に郊外の警備について頼む」

オーカシス陸軍基地の徳川大佐が説明のバトンを受け取った。  
白髪混じりのグレーへアでほりが深いダンディーな方だ。年齢は確か50前後だったはず。

「郊外警備は首都から東西南北に四つの拠点を用意する。それぞれの拠点にマップスを20機ずつ。計80機を配備する予定だ。これで首都に接近する車両や航空機の監視を行う。」

モニターに映る地図の倍率が下がり、より広い範囲が映し出され、拠点に赤いマークが打つてある。

これも前回と基本的に同じ配置となっている。

「基本防衛網はこのようになつてている。今回もこれに加えて遊撃部隊としてキーナ空軍基地の部隊、そしてカシゴマ海軍基地の部隊を10機ずつ応援に出して貰いたい」

「マップス10機で確定か。

南側から攻められても何とかなる数字だと思つ。

「了解した。ところで応援で派遣される部隊の配置はどうなつている?」

事前の資料には無かつたので確認をとる。下手すれば戦場になるのだ。

自分の部下がどういう扱いを受けるのかを知らなくてはならない。

徳川大佐がこちらの質問に答える。

「空軍と海軍には首都の上空を旋回してもらう予定だ。我々が敵を見逃したときのために準備してもらいたい。旋回範囲を地図に出す手元の地図が拡大されて赤い枠が現れる。

「これが君達の警備範囲だ。高度についても続けて説明しよう。都市の形が立体的になり、視点が上から見下ろす俯瞰図から、横から見た図に変わった。

「空軍には都市上空5kmの警備を、海軍には都市上空2kmの警備を頼みたい」

なるほど、首都の地上は警察、郊外は陸軍の大部隊、低空は海軍、雲の上からは空軍か。これなら敵の侵入はどこかでキャッチ出来るだろう。それにこの高度なら見通しが効くので、奇襲は受け難いはずだ。

派遣しても一瞬で全滅は無いだろう。

「了解した。では要求通りこちらからマップス10機編成の一個中隊を派遣する」

続けて海軍の方も派遣を決定する。

「感謝する。空軍の方に追加注文があるのだがよろしいかな?」

大体予想がついた。おそらく広域レーダーを積んだ偵察機のAWACSを出せと言うことだろう。

「AWACSを追加で派遣してもらいたい。地上にも防空レーダーを設置する予定だが、念には念を入れておきたいのだよ」  
やはりか。ただ、至極真つ当な提案だ。乗らないわけにはいかない。

「分かりました。ではAWACSも同時に派遣します。」

これが終わったら偵察部隊にも通達しておかないとな。

「ノートパソコンにメモを今のメモしていく。」

「助かるよ。他に何か聞きたいことや提案は無いかな?」

応援が取り付けられたことに安堵して、少し顔が緩んだ徳川大佐が上機嫌で質問を促した。

海軍の毛利大佐が組んでいた手を解いて、右手を軽く擧げる。眉間に深いシワがいくつも刻まれた眼光鋭い人だ。まるで老狐のようである。

「派遣した部隊の指揮は誰がとるのかな？」

大事な自分の部下たちだ。出来れば自ら指揮を取りたいのだろうか。と思案していると、徳川大佐がにっこり笑顔になつた。

「安心して貰いたい。警察、陸海空軍はそれぞれ独立で指揮してもらう。その代わり指揮官の間は通信をつなげて連携する」

毛利大佐がふむ。と頷きながら腕を組み直してその意図を確かめる。「指揮系統を一つにまとめた方が楽ではないか？」

徳川大佐は笑顔を崩さぬまま答える。

「確かにそうかもしれないが、いかんせん私はこの広く展開している部隊の指揮で手一杯でな。それに所属は君達の部隊だ。直属の上官が指揮した方が動かしやすいだろ？」

「ふむ、了解した。」

どうやら毛利大佐は回答に納得したようだ。

「どうか、これってへまをしたら責任を負わせるための口実じゃないよな？」

陸上は陸軍が大部隊を展開するので、数の暴力で多分抑えられる。海軍の警備は低空なのだが低空侵入は陸軍の防空網に確実にひつかる。

つまり上空からの侵入があれば丸々空軍の、そして私の責任となる。そうなれば色々と喜びそつた連中がいるのだが。いや、ただの考え過ぎか。

それにそれを防ぐためにA W A C Sの派遣を要求されている。

恐らくこの件に関しては味方も敵もない。

邪推を捨てて、一口お茶を飲んでから、今のやりとりで生まれた疑問を聞いてみる。

「今の話に関連して、質問よろしいですか？」

徳川大佐がこちらに手のひらを向けた。

「どうぞ」

「指揮官の所在はどこになるのでしょうか？」  
派遣した中隊の指揮をとるために私も首都に向かう必要があるのかどうかを確認したかったのだ。

「所属基地から指揮をとつてもらひ。」この説明は陸軍大将からして頂きたい

陸軍大将が咳払いをして声を出す。

「理由は簡単だ。毎回の「ごとくレトリアが軍を展開する可能性がある。その中で北の防衛だけに気を捕らわれていると、南や東西からの侵攻を防げない。そのため、諸君の基地でも地域の警戒に当たつて貢うため、基地からの指揮をしてもらひ」

なるほど。これは最悪二方面指揮をする必要があるのか。  
願わくは何も起きないことだ。

「了解しました。では、最悪の事態として首都と所属地域の二方面指揮を想定して用意すれば、よろしいでしょうか？」

陸軍大将が大きく頷いた。

「つむ、それで良い。国外からの侵攻があれば軍本部から指令が下る。いつでも動けるように用意しておきたまえ」

海軍大将と空軍大将も同調して頷く。やはりトップとの会議は緊張する。

なんだこの緊張感は？

私は一昨年まで中尉だった人間で、この場に参加している者から見ればひょっこも同然だ。

モニター越しのはずなのに、不思議な圧力を感じてしまう。  
質問で話しかける時にこちらの緊張や焦りを表面に出さない、だけで精一杯だ。

不思議な喉の渴きを感じてもう一度ペットボトルに口をつけ、お茶を飲む。

徳川大佐は話が終わつたと判断し、次の質問を促すが、誰からも質問は出なかつた。

「よろしいようだね」

議長の警察庁長官が話を区切る。

「では、次に当田の両首脳の動きについてだが、このようになつている」

首相は公用車で首相官邸から国際会議場へ。レトリア大統領は空港から公用車で国際会議場に向かうルートが矢印となつて地図上に表示される。

基本的に大通りを通る最短ルートだ。

「両首相の護衛は我々警察のみで行う。公用車と併走しながらパトカーを走らせる予定だ。また移動する時間帯はこの移動ルート近くの道路を全て封鎖することになつてている」

日曜日だから良いものの、平日でやつたら一般市民は大混乱だらうな。

会社への遅刻が普段の何倍になるのだろう?

きっと地下鉄乗車率と一緒にレコード記録になる。

ちょっとその光景を想像して顔に出さないように苦笑いをしていたら、海軍大将が何故マップスを配置しないのかと問い合わせた。

「政治的に色々あるのだよ。大統領に銃をつきつけながら連行している。けしからん! と見る輩もいるそうでね。政治家は火種を下手に増やしたくないそうだよ。外交的には悪くない判断とは思わないかね?」

過激派の刺激は出来るだけしたくないつてことか?

確かに今の大統領は会議に参加して話し合いで解決しようとする稳健派と言えば稳健派の人間だ。

過激派にとつて、そんな稳健派の人間を銃で脅している国は蛮族国家である。即刻打倒すべし。と捉えられてしまうかもしれない。だが、彼がいなくなれば過激派が押さえられなくなる。

それを考慮すると、過激派に襲われる可能性がある人なのだから、

軍隊のマップスによる護衛が必要だと思つたのだが、政治的な言いがかりを考えると納得がいった。

そうか、それで警察の護衛で、パトカーなのか。これなら過激派も言いがかりが出来ず、襲われても最低限の対処が出来るという作戦だろう。我が国の首相の方にもマップスが配置されないのは、威嚇だと過激派にとらわれないようにするためだろうか。

海軍大将もすんなり納得したようだ。

「なるほど。最低限で最大限の護衛……ということですか。それとも苦労しますな」

どうやら私の考察はあつていたようだ。

「お互いまですよ。万が一の際は是非お力を借りしたい」  
私以外の参加者が皆笑い合つている。

今まで全員が同じような経験をして、あるあるネタが通じたのを楽しんでいるようだ。

「お偉い様方はいつも無茶をおつしゃる」

「なに、それでもやりとげるのが我々の仕事だ。それを誇りに思おうじゃないか」

私にはとても笑える状況じゃないと思つたのだが、愛想笑いでこの雰囲気を乗り切ることにしよう。

「これが年期と経験の差というやつなのだろうか。

「話がそれてしまつたな。本題に戻すとしよう

警察庁長官が咳払いをして、脱線した流れを元に戻した。

皆の切り替えもとても早く、あつといつ間にびりっとした空気に戻つた。

「移動に関しては先ほどの通りだ。そして考えられる最も狙われやすいタイミングとして、会議後の記者会見が考えられる。わざわざ国際会議場の広場にステージを作つて、大勢の記者の前で話すのでは。入場整理をかけているとは言え、どうしても紛れ込まれやすい。これに対しては私服警官の大量動員と壇上のSFPに任せるとしかあるまい」

郊外に展開される陸軍にはどうすることも出来ないし、上空を巡回している海軍にも空軍にも、群衆の中からテロリストを捕捉することは難しい。

確かに人間による奇襲であれば記者会見のタイミングがベストである。

まったくひどい無茶をしてくれるものである。

「これに関して軍の方からは何も出来ませぬな」

眼鏡をかけた少しやせ気味な初老の空軍大将が確認をとる。

「残念ながらそうですね」

特に何もすることが出来ないので、警察庁長官が次の議題に進める。

「そして次に帰路の護衛だ」

モニターの地図を見ると行きと同じように矢印が描かれている。両首脳の帰りの経路は行きと同じルートのようだ。

「基本的に行きと同じルートを通りお帰りいただくことになつて

いる。警備方法も行きと同じで、パトカーによる護衛だ」

となると帰りも緊急時以外では、軍の方で何か特別な事はないか。

「今までのは、平和にことが進んだ場合のルートになる」

失礼と。断りを入れて、警察庁長官はコップに入った水を飲み、喉に潤いを与えて再度説明を始めた。

「襲撃があつた場合の避難経路についてだが、地図で説明しよう」

地図の上に8つのポイントに赤い点がうたれた。

「基本的に、襲撃犯とは反対方向の待避ポイントに裏道を使いながら避難してもらうつもりだ」

特にこのポイントには頑丈な施設やショルターといったものは無かつたと記憶しているので質問をした。

「この待避ポイントはどういう施設でしょうか？」

警察庁長官が不思議そうな顔をしていたが、秘書の耳打ちにより納得したようだ。

「どうか、君は今回首都の警備は初めてだったね。これは緊急事態専用の地下通路だ。他の主要都市に直行するリニア車両が用意され

ている」

噂には聞いていたが、こんなところにあったのか。

ということはそのリニアを使って安全なところまで避難すると言つことだな。

念のために確認をとる。

「では、その待避ポイントに到着次第、両首脳はリニアで安全な都市に待避するという認識で正しいでしょうか？」

警察庁長官がその通りだと頷いた。

なるほど。普通の都市地下間に地下高速鉄道があるのだが、まさか首相専用の緊急経路まであるとは恐れ入った。

「質問はもうよろしいかな？ 話を戻すぞ。両首脳が乗っている公用車はもちろんF-T-E粒子制御による防弾仕様だが、さすがに大火力の攻撃を受ければ簡単に破壊される。公用車の位置はGPSで常に把握している。軍の方にも位置情報を常に提供するので、我々と協力して、一機たりとも敵を近づけさせないで欲しい」

なるほど、その時は海軍と空軍の遊軍が援護に入る訳か。徳川大佐が話に続く。

「都市圏で襲撃を受けた場合、陸軍からの援護はどうしても遅れてしまう。君達海軍と空軍が頼みの綱となる。よろしく頼むよ」

私の想定通りか。毛利大佐も分かりきっている様子で腕を組みながら頷いている。寝ているようには見えないので本当に分かっているのだろう。

会議の両首脳の移動について、一通りの説明が終わつたので、質問は無いかと聞きながら、警察庁長官が参加者に確認をとる。

すると海軍大将が緊急事態における大事な質問を聞いた。

「市街戦が起きた場合、市民の避難は警察でやつてもらえるのか？」

国際会議場はオフィス街にある。日曜日と言えども人は多少いるし、避難経路の中には商業区など人が集まる場所もある。

確かに戦闘が始まつたら巻き込まれる人が出てもおかしくない。

警察庁長官が非常に重いため息をする。どうやらあまり良い話は聞

けそうに無い。

「いつものことながら、避難誘導は潜伏をせている私服警官に取り仕切つてもららう予定だ。だが、全ての地区で避難誘導が完了するまで、少なくとも10分はかかるだらう。避難が完了していない区域では出来るだけ攻撃を自重して欲しい」

空軍大将が困った様子で頭をかいしている。

「やはり、そうなるか。10分攻撃をせずに注意を引き付けているだけ。というのは毎回言っているが、なかなか骨が折れるぞ？ 最低限の自衛は認めて欲しいものだが」

恐らく、敵部隊の攻撃が建物に当たつたり、こちらの攻撃が市民を巻き込むリスクを考えての判断だらう。

何か手はないかと思案していると、ちょっととした思いつきが生まれた。

お茶を勢いよく飲み気合いを入れる。

「一つ提案があるのですが、よろしいですか？」

参加者が一齊に反応し、「ほう」「む？」と漏らしながらこちらに注目する。うつ、緊張する。

「まず、確認になりますが。避難が完了していない区域での戦闘は、流れ弾が市民に当たる危険性があるので自重するのですよね？」

警察庁長官が頷く。

よし、一つ目のハードルはクリア。

「そうなると、敵の射線上に建物を入れさせないよう、更に建物に隠れられない。そして、こちらの射線上にも建物が当たらない位置からの攻撃というのはいかがでしょうか？」

警察庁長官が頭をかきながら私の提案の真意を問い合わせた。

「そんな都合の良い場所があるのかね？ 基本的に碁盤目上で見通しの良いところがあるとはいえ、建物の陰には簡単に隠れられるぞ。その通りだ。街中や低空ではそんな都合のいい場所は無い。空軍所属でマップスによる戦闘を多く経験した者だから見える位置がある。」

「あります。その都合のいい場所。敵の真上です。高高度からのマップスによる狙撃ならパンチポイントで敵のみにダメージを与えられます。戦闘機と違い上空での空中待機が可能なので、安定した狙撃が可能となつてこます」

警察庁長官は顎に手をあてながら考える素振りをしながら続けて聞いてきた。

「なるほど。敵が旧兵器の車両タイプならそれで何とかなるだろ？。ではマップスだつたらどうする？ 空中戦に持ち込まれたら、やはり流れ弾が市外に落ちるぞ？」

そこがこの提案の最大の問題だ。だが、それでも地上で注意をひきつけるだけより遙かにマシだ。

「その通りです。なので、空中戦に持ち込まれたら、こちらは常に敵の上空に位置するよう動き、こちらからの射撃は止めて近接格闘戦をしけけます。これなら都市部に流れ弾が当たりにくくなります」

警察庁長官はなるほどと頷いた。

どうやら2つめのハードルもクリア。

「それなら確かに注意を引きつけるだけよりは良さそうだ」

警察庁長官は納得したようだが、同じく空の上に配備される海軍の毛利大佐から質問が来た。

「なるほど。坂本大佐。お若いながらも良い戦略を思いつく。しかし、そうなると我々海軍の低空部隊はどうすれば良い？」

多少気の引ける提案だが、これには乗つてもらわなければならぬ。「海軍には敵部隊の注意をひきつけて、上空に上がられなければならない。して頂きたい。それも基本的に防御のみで、です。敵は建物を盾にすることが迷い無く出来るので、低空と地上で海軍と警察の部隊が展開していれば、わざわざ弾が当たりやすくなるような空の上に上がることは無いはずです」

毛利大佐は大笑いしてから、こちらを睨み付けてきた。

「君には冗談のセンスもあるようだ。この私の部隊におどりになれと？」

言葉に怒氣が含まれているように聞こえる。部下をおとりにさせてくれと言っているのだ。やっぱりそうなるよな。しかし、ここで引き下がるわけにはいかない。

「毛利大佐。申し訳ありませんがこれは冗談ではありません。確實に敵を撃破するための戦略です。毛利大佐が擁する精銳の海軍部隊が敵をひきつけて、敵を地面にはりつけられれば、狙撃による敵部隊の撃破が容易となるのです。貴官の部隊が機能すれば、私達空軍側もより力を発揮出来るのです」

相手のプライドをくすぐりながら交渉を推し進める。

「だが、それでも基本防御のみというのは厳しい」

やはり簡単に崩れてくれないか。警察庁長官から待つたをかけられそうだが、譲歩案を出してみる。

「ならば、敵に当たらなくても道端に当たるように射撃、真上から接近しての格闘攻撃といった都市の被害が少ない戦法を徹底していただけないでしょうか？」

右まゆげをぴくっと動かし、こちらをにらみ続けてくる。  
くつ、胃が痛くなつてくるな。

「なるほど、牽制まではさせてもらえると？」

先ほどと変わらない怒氣の含まれた低い声だ。

「その通りです。貴官の部隊ならば、その牽制で敵部隊を撃破することも可能だと思います」

毛利大佐が軽く吹き出し、大笑いをし始めた。

あれ？ さつきまで凄い迫力だったはずだ。何が彼を笑わせたのだろうか？

不思議そうな顔をしていた私に毛利大佐が真面目な顔をして向き直った。

「いやー、すまんすまん。君との問答があまりにも愉快でな。その歳でなかなか弁が立つでは無いか。戦略眼もなかなかのものだ。派遣された数々の実戦で訓練されたのかな？ そして何よりもその度胸！ なるほど、特例とはいえその歳で大佐に任命されただけはあ

るな

なつ、こつちが試されていたつてことか。この老狐なかなかやつてくれる。

思わずポカンとしてしまったが、これで警察庁長官から許可が出れば、この方法でいいのはずだ。

「いかがでしょうか？ 長官殿

腕を組んでうなり始めた。どうなる？

沈黙が場を包んだ。実際には、ほんの5秒程度だったのだろうが、その数倍に感じられた。自分の部下の生死が左右されるのだ。出来るだけ危険が少ない方が良いに決まっている。

短くて長い沈黙が破られる。

「分かった。それで行こう。ただし、必ず建物には当ててはならない。それと出来るだけ弾を外して流れ弾を作らないでくれ。こちらも部下を死なせる訳にはいかない」

良かつた。提案が通つた。たまつていた唾を飲み込む。

徳川大佐が追加の提案をする。

「おそらく避難が終わる頃合いに陸軍が到着するだろう。それまで持たせてくれれば、こちらで必ず鎮圧する。あまり無理をしなくては良いからな」

その通りだ。住民の避難が完了するまでの10分。この間の目標は住民が安全な場所に退避するまでの時間稼ぎで、私がした提案は時間稼ぎの方法だ。敵を完全に撃破するための方法では無い

「ありがとうございます」

これで、参加するメンバーが集中砲火を浴び続けて反撃も出来ずには撃墜されることはなくなるだろう。

陸軍大将が今の問答をまとめてもう一つの確認をとる。

「ということは、基本的にどのタイミングでの襲撃も、この方法で避難と時間稼ぎを行うということでしょうか？」

全会一致で合意する。

これで警備の大体の方針が最終決定されたようだ。

やれやれ、終わつたら手洗いに行こう。

警察庁長官が話をまとめて、終了の挨拶を始めた。

「これにて国境資源会議警備打合せを終了する。参加して頂いた皆様。ごくろうさまでした」

席を立つて皆で一斉に礼をして打合せが終わった。

書記官がモニターと通信を切り、並んでいたそうそつたるメンバーの顔がモニターから消えた。

気が抜けたせいで、部屋にまだ書記官がいるのに思わず大きなため息をついてしまった。

「はあ……疲れた……」

書記官がこちらのため息に気づき、苦笑いを返してくれる。

「おつかれさまです大佐。さすがに緊張しましたか？」

「当たり前だ。あのメンバーで緊張しない同世代はないと思うが書記官は何故かほつとしたような笑顔になつた。

「何か変なことを言つたか？」

「いえ、大佐も人間だと思つて安心したのです。その歳で佐官なので、一時期、一部の間でAIを積んだ精巧なアンドロイドなのではないかと噂が流れていましたから。ちなみに以前ここにいた大佐もこういった会議は緊張して、始まる前と終わつた後には大体トイレにいましたよ。では今回の議事録をまとめてくるので失礼します」書記官はこちらに敬礼をして部屋を出て行つた。

いや、確かにめいっぱい背伸びをしながら仕事をしているのだが、アンドロイド扱いとは……。

もうちょっとと素を出した方が良いのか？

椅子の背もたれに全体重を預けてノビをして身体をほぐす。

腕時計を見ると15時を回つていた。

「後は書類仕事と派遣部隊についてか」

だが、その前に……

「予想以上に疲れたか……」

そのまま部屋に戻ること無く軽く居眠りをしてしまつた。

田が覚めて時計を見ると既に16時だ。

この会議室に人が入ることはあまり無いのだが、今日は誰も来なくて本当に良かった。居眠り姿を見られたらどうなっていたことか。ちょっとしたサボり行為に反省する。

次からはしっかり部屋でしよう。

あれ？ それも違うか…

そんな仕方の無いことを考えて、少しボーッとした頭で手洗いに寄つてから執務室に戻った。

## 第七章「それぞれの絆」

### 第七章「それぞれの絆」

司令室に戻った後は、とにかく書類と格闘するつもりでいたが、端末を立ち上げると、先ほど打合せに参加していた眼鏡の空軍大将から極秘回線で連絡するようだ。とメールが入っていた。

背筋が凍るような寒気に襲われ、眠気が吹き飛んだ。

「うつ、さつきの居眠り中に来てたか」

気が進まないが、連絡するしかない。

部屋に設置してある通信機を極秘回線専用モードに設定する。機械音の案内が流れ、指示された通りに行動する。

指紋確認……OK。網膜チェック……OK。声帯認証……OK。

（キーナ空軍基地、坂本龍大佐と認識。どちらにお繋げしましょう？）

「空軍総司令部、ミヤノシゲル宮野茂空軍大将につないでくれ」

30秒間の呼び出し音後、空軍大将が通信に出た。

「遅かつたじやないか坂本。喋り方はいつもの気楽なやつで良いぞ。で、遅くなつた理由だが君のことだ。また居眠りでもしていたのではないか？」

バレていた。何を隠そう、この人がマップス特殊部隊を編成した男で、私の直属の上官だった人だ。パイロット時代の時もサボリを色々と見抜かれていた。

「相変わらず、エスパーのような方ですね。私は監視カメラでもつけているのですか？」……正解です

滅茶苦茶笑われた。

「おい、どうしてくれる？ 笑い過ぎて腹が痛いぞ。ハハハハ」

「どうやつてこれを止めようか……」

「そこまで面白いこと言いましたか？」

「そりやあ、まあな。さつきの会議のクソ真面目な態度を見て、立派に成長したと思ったら、大して中身は変わつてないようだな。疲れたら即居眠りしていた癖もそのままか。書類の山の中でよく眠つてないか？ さつきの会議ガチガチに緊張してちびらなかつたか？」  
「少なくとも今まで漏らしたことは無いですよ！ それに書類の中で居眠りもここ数年してないです。宮野司令こそ、会議の時だけは真面目なんですね」

精一杯の皮肉を返す。そう、この人は会議とか公式の場では真面目振るのだが、根本的に破天荒な人なのだ。

ほとんど新兵しか乗つていない実験兵器のマップスを戦場に出したり、私を大佐に推薦したのも彼だ。

「おう、我が輩はいつでも真面目だぜ？ お前もあのメンツの中で緊張しないくらいに早く成長して欲しいもんだ。ひよっこ大佐君」それも見抜いていたのか、段々頭が痛くなつてきた。早く本題に入つてもらわなければからかい続けられそうだ。

「で、今回は私をからかうためにわざわざ極秘回線を使えと指示したんですか？」

「久しぶりの二人きりの通信なのにつれないねえ……まあ良い。本題に入るか」

最後で宮野大将の聲音が変わつた。どうやら本氣モードのようだ。

「坂本。お前今回の警備体制についてどう思う？」

先程の会議で決定したばかりなのにどうしたと言つたのだろう？

「どう思うと言われても、両首脳を狙つテロリストに対しては有効な布陣かと」

「そうだ。恐らく両首脳を狙つた攻撃にはこれで良い。ただ、目的が他の物にあつたらどうなる？」

「どういうことだ？ 彼には一体何が見えている？ ただ、すぐには思いつかなかつたので諦めて聞くことにした。

「どういうことでしょうか？」

「いや、例えばだ。我が輩がテロリストではなく、レトリアの軍人

や過激派の政治家だつたら会議のタイミングに首都を襲う際、首脳を襲うのは陽動にすると思つたのを、首脳襲撃が陽動？ そう仮定すると、何か別の目的があることになつてしまつ。

「となると、別に本命があると申しますよね？ でも一体何が？」

「多分我が輩よりも君の方が詳しい物だよ」

私が富野大将よりも詳しい物……

「なるほど。菱田重工のマップス関連ですね。それも噂の第三世代がですか？」

「そうだ。敵はヤポネの同盟国が持つ第一世代型マップス強奪作戦を実施してでもマップスを手に入れた。となると、さらに発展した第三世代型はどうやって手に入れる？」

あの時は確かに、秘匿されていた各種パーツを生産する工場と、パツを集めて機体を完成させる組み立て工場、そして更に基地に至るまでの全ルートが漏れていって、組み立てが完了した機体の搬出中に強奪された。と聞いている。

「なるほど。首都に警察や軍の注意を最大まで引き付けられるイベントが首脳襲撃。ということですね。で、その間に首都にある菱田重工の本社と工業地区にある工場で、第三世代型のろ獲、もしくはデータの収集を行うと？」

「そんなところだ。勘の良さはさすがだな。我が輩が鍛えただけはある」

素晴らしい自画自賛つぶりだが、ある意味誘導尋問的にこの答えを導き出したので、否定はせずに皮肉だけ返しておこう。

「その最後の一言は本来私が言つべきことなのでは？」

「なに、君の心境を代弁したまでだ。で、勘の良い君は「ひでじ」するのだ？」

あつさりかわされた。しかもカウンターのおまけつきで。

恐らくこの口振りだと既に答えは持っているのだろう。

こちらが試されている。

「そうですね……まずは菱田重工の方に警戒するより連絡を入れる。そして、PMCを雇つてもらひより進言する。次に元特殊部隊にいた松平に、いつでもマップスで出撃出来るように武装とメンテナンスをするように伝える。といったところですかね？」

基本的な模範解答だらう。PMCも使えるはある程度の時間稼ぎは出来るはず。

「まあ60点の及第点だな。普通に考えればその案なのだが、その案だと襲撃があつた時は大きな被害を受ける。日曜とはいえ出勤者がいるはずだ。最悪の場合、貴重な技術者から死者が出かねん。戦闘が起きても民間人から一切の犠牲者が出ない方法を考えろ」

襲撃の際に機体やデータが強奪されず、技術者を始めとする民間人も現場にいなくてよく、敵を撃退する方法か。

頭をフル回転させて、策を考える。すぐ答えが出せず沈黙が10秒ほど間続いてから、宮野大将が口を開いた。

「確認するぞ？ 敵の目的は機体とデータの強奪。ついでに技術者を拉致する可能性もあるな？ ということはだ。建物を破壊することはまずしない。泥棒が金銀財宝の入つた木製の宝箱を、持つている爆弾使つてあける事はいだろ？ 空っぽだと分かれば、ハッ当たりでぶつ壊す氣にもなるかもしれないがな」

宮野大将が軽く笑っている。どうやら自分の例えがうまく言えたことに対して御満悦のようだ。

「ただ、おかげで私も何が言いたいか分かつた。

「なるほど。会議前に中身を引つ越せ。つてことですか」

「ほほお？ それで？」

「ごく楽しそうに相槌をうつてきた。

まったくこの人は本当に良い性格をしている。

「試験用の第三世代型は、来月の資源会議前までにこちらの基地に一機送られます。そのタイミングで第三世代型に関する部品とデータをキーナ空軍基地に全て移動させて、首都の方は空にさせま

す。」これなら出勤する人間もいないでしょ?「

昔読んだ本にこんな作戦があつたな。確かに名前は空城の計。それは確かに、敵が攻めてきているのに、あえて部隊を展開しないまま城門をあけて、何事も無かつたかのように振る舞い、罠があると思わせる計略だ。今回はその名の通り中身が空っぽになつてているのだが。

「良いねえ。素晴らしい案だ。ただ、宝箱も吹っ飛ばされちゃ困るんだよねえ?」

言いたいことは分かる。設備だつて貴重な物だ。破壊されて良いことなど一つもない。もちろん対処方法は考へてある。

「富野さん。ミミックってご存知ですか?」

言いたいことはきつと伝わつているのだらう。

相づちを打つ声音は相変わらず楽しそうだ。

「真似する。とか擬態。とかその辺の言葉だな。で、それがどうした?」分かつていてる癖になあ……。それがどうしたの? 声が踊つているじゃないか。顔が見られたら確実にニヤニヤしてゐるぞ。

「昔やつたゲームの話ですが、宝箱があつて喜んで開けようとするし、実はかなり強いモンスターで、下手をするとゲームオーバーになるようなトラップがあるんですよ。今回はそれを真似します」

「ほお? それをどのように真似る?」

さて、ここからは割と無茶な要求だ。心してかからう。

一つ深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

「菱田重工の地上倉庫に、第一世代型マップスに第三世代型の装甲を貼り付けたのと、完全に装甲だけのハリボテを設置します。それも敵から見えやすいように。敵がマップスや車両で襲撃をしかけるなら、偽装マップスで対処出来ます。そして、本社の方は、データ採集のために歩兵が投入されることが想定されるので、施設内に社員の格好をした陸軍部隊に待機してもらい、歩兵を迎撃するのにはいかがでしょ?」

拍手の音が聞こえる。どうやら正解のようだ。

「フフ、これはヒント無しでいけたか。まつ、これが何だかんだで

普通に警備するより、被害が少なくて済む方法だろ？ で、誰が菱

田重工と陸軍に今の話を頼むんだ？」

ハハッ、やっぱそれが一番の問題ですよね？

ただ、ここまでこちらを誘導してきたところなんらば。

「もちろん、富野さんですよ？」

通信越しなので、相手には伝わらないだろうが満面の笑みで伝える。

「良い笑顔だねえ。まつ、愛弟子がここまで頑張ったんだ。ご褒美で菱田重工への通達と陸軍への応援要請は我が輩の方からやつておこつ」

つて通信越しだから分からぬはずなんだが、どうして分かつたんだ？

ま……まあ良いか。それにしても連絡を空軍大将である富野さんが担当してくれて良かつた。組織がでかいだけあって、トップの声が物事を早く進める上で大事なのだ。私がやつたら時間がかかりすぎる。

「助かります。というか本当にこのひたちの様子は見えていませんよね？」

通信越しで吹き出した音が聞こえた。どうやらまた大笑いされている。

「一応、アドバイスを出しておこう。坂本、お前ちょっとカマかけにひつかかりやすいぞ」

いや、あなたが相手じゃなきや……ってこれは言い訳か。どうにも苦手意識というか高い壁を感じるというか。自分の師匠に対してはこんなもんだろ？ いつか超えられるよう精進しよう。

そして今できる最大限の反撃を繰り出す。

「富野さんもさつき私の話を聞いている最中、ずっとニヤニヤしていましたよね？」

「フフ、何のことかな？ 我が輩は愛弟子の提言を孫の作文を聞いてやっている時と同じくらい真剣に聞いていたぞ？」

どんな例えだ……ただ、声の方は浮かれている声だ。

「それはニヤニヤどろぼじや済まないですね。というか相変わらず例えが分かりづらいですよ……。でも、楽しんでいらっしゃるようで何よりです。楽しみ方は少し変わっていると思いますけどね」

「何、君もうちの孫と大して変わらないからな？ そんな変な例えでもないさ。それに君をからかうのは頭を使ってなかなか面白いのだよ。張り合いがあつて、とても良い」

思いつきりため息をつきたいところだが、ぐつとこらえる。

「やれやれ、こんなのと一緒にされたらお孫さん泣きますよ？」

どつちかつていうと泣きたいのはこっちの方なんだが、こんな冗談を受け入れたらこっちの負けだ。

「大丈夫さ。我が輩の自慢の孫だからな」

富野さんは言いたい放題言つた後、大きく咳払いをして、話がそれたが、話したいことは既に全て話した。また何かあつたら連絡しろ。内容にもよるが何とかしてやる

どんなにおひやらけていても最後にビシツと決めるから憎めない。これがこの人がここまで地位に上がつた理由の一つなのかもしない。

「了解です。その際はよろしくお願ひします」

「おう！ んじや通信終了だ。またな

「失礼します」

向こうの音が完全に聞こえなくなつた。どうやら通信が切れたようだ。

師匠との問答が終わり、緊張がとけたからか、また少し眠たくなつてきたので、リフレッシュルームに行ってコーヒーを飲みながら談笑でもして眠気を払おうと決意し、部屋を出た。

リフレッシュルームにつくと休憩中のガンドック一同に遭遇した。

軽く挨拶をする。

「ガンドックじゃないか。休憩中か？」

こちらに3人が振り返つて敬礼を返してから、ガンドック1の犬塚イヌヅカケン

剣が状況の説明をする。

「はつ、今朝の訓練レポートを書き終えて、シヨコレーターで戦闘訓練を行つた後の休憩であります」

「で、向こうで何か一人が騒いでいたようだが、何をしてるんだ? ガンドック3の小山<sup>ヒヤマシズカ</sup>静<sup>タカイノリヨシ</sup>が少しめんどくさそうな顔をしている。

「何というか、いつもの先輩と高田です」

「ああ、なるほど。いつものね。妙に納得する。

そう、いつも通り、離れた場所でガンドック2の吉川理恵<sup>ヨシカワコ</sup>とガンドック4の高井則良<sup>タカイノリヨシ</sup>が互いに腕を組みながら言い争いをしている。

喧嘩するほど仲が良いとは言うが、ここまでになると漫画とか小説では何か裏がある勢いだな。こう実は好きなんだけど素直になれないといった類いの……いや、どうだろつ。

とりあえず、それを置いておいて、普段の疑問をぶつけてみる。

「何というか、お前等は仲が良いのか悪いのかわからんな。戦闘中のチームワークは目を見張る物があるんだが」

そんな私の疑問に、ガンドック5の石山<sup>イシヤマ</sup>慎治<sup>シンドзи</sup>が応えてくれた。

「隊長がまとめあげてくれるおかげです。ただ、ああ見えて彼らは仲が良いのですよ。今のも姉弟がじやれあつてているようなものです。たまに見えていて羨ましくなることもあります」

そんなもんなのか。今度ちょっと互いの気持ちを確かめてみたいなと思つていたら。横から殺氣のようなを感じた。

殺氣の方に視線を変えると、いつも大体半目の小山だが、その半眼に何か激情がこもつた視線で石山を睨みつけるようにを見ていた。ただ、その視線に気付いた石山の方は、極めて冷静な顔をして小山を見つめ返している。

彼ポーカー強そうだな。おつと、思考が変なところに飛んだ。

さすがに睨まれ続けられているのを疑問に思つたのか石山が口を動かした。

ただ発せられたのは言葉の爆弾だ。

「どうした? そんな怖い顔をして。皆、君の表情や声に可愛げが

無いと言つが、そんな表情ではかわいい顔が台無しだ」

そんなことを言いながら小山の頭に手をおいて、優しくなで始める。

「え……えつと、ちょ……ちょっとお手洗いにいってきますっ！」

小山は俯いて顔を見せないよう部屋を走って出て行つたが、声は上擦つていたし、顔が随分と赤かつたな。

……いや、何だこの状況は？

「あー、石山准尉？ 今のは何だ？」

私の質問に對して不思議そうな顔をしてこちらを見ている。

「いや、特に何でもないのですが、強いて言つなら客觀的事実を述べただけです。それに彼女は頭を撫でると機嫌が良くなる傾向があるので。つい

つい。じゃない。彼は天然たらしなのだろうか？

犬塚にアイコンタクトをとつて、こいつらはいつもこんななんのか？ と確認する。

私の意図を察したのか察してないのかは分からぬが、両手を軽くあげて、困ったような苦笑いを浮かべている。  
仕方ない。今後のことを含めて話が出来たので、耳打ちのために手招きをした。

「まあ、部隊内のメンバーが引かれ合つのは仕方ないんだが、色々と大変だぞ？」

「分かつてはいるんですが、これでまとまっていますし。下手に禁止して目の届かないところで問題起こされても困るので、多目に見てください」

思わずため息を吐いた。これが妻帯者の余裕というやつかな？ 肩に手をおきながらとりあえず適當な応援の声をかけておく。

「まあ、何だ。苦労しそうだな」

「苦労というよりも、もどかしい感じが続くだけですけどね

「それだけで、済むと良いな。上手く立ち回れよ」

「冗談じやなく、もどかしさだけで済むなら良い。下手にこじれないと頑張つて貰おう。

石山が何の話か分からぬよう、首を捻つてこっちを見ている。

「まあ、何だ。君もあまり人を刺激しすぎないことだな」

「はあ、了解しました」

脇に落ちないような困り顔で、気の抜けた返事をされた。

ガンドック小隊の人間関係が私の中で更新された。もどかしくも微笑ましい話が終わつても、ガンドック2とガンドック4の言い争いは未だに続いていた。

「で、そろそろ言い合つてゐるあの2人は止めないのか？」

犬塚の代わりに石山が答えた。

「そろそろ終わる頃かと。二人揃つてシミュレータールームに行くんじやないでしょうか」

マップスの訓練や模擬戦が出来るシミュレータールームに、さつきまでそこにいたとは言つてはいたがどういうことだろう。

「模擬戦後シミュレータールームで訓練をしていたのですが、撃墜数の勝負を始めたのです。現在の結果は引き分けなんですよ。決着をつけてやる！」と息巻いていたのですが、一旦落ち着けさせるために隊長が休憩に無理矢理引き摺り出したんです。それで、そろそろ提示した勝負を再開する時間になるのですよ」

あー、それでか。普通の喧嘩とは違つてマップス関連の言葉が出てゐるのは。

「ただいま。何だ、まだやつてるんだ」

大分落ち着いたのか小山が戻ってきた。赤かった顔色は元に戻つてはいるが、聲音はいつもよりほんの少し柔らかかったし、微妙に口が緩んでいる。

なるほど、確かに機嫌が良さそうだ。ただ、君が惚れた相手はどうやら恋愛という戦いにおいては、戦場の時ほど勘が良くないようだよ。「何か憐れみの目が向けられてゐる気がするのですが、気のせいですかね大佐？ 何か一時期、隊長が見せたような目です」ちらつと犬塚を見るとそっぽを向かれた。

なるほど、全く同じことを考えて表情に出してしまつた時期がある

みたいだ。

それにしても小山は意外と勘が良いな。何とかこまかせるか？

「気のせいだ。君も周りに振り回されて大変そうだと思つただけだよ」

先ほどの田が高井と吉川の言い合ひが原因だと勘違いしてくれたようでああ。といって納得してくれた。嘘でこまかす時には眞実を混ぜると効果的だ。

しかしこの先、あの一人より君をもつと振り回す奴が田の前にいるのだが、分かつていいのだろうか？

そして、チームの予想通り、大いに白熱した2人は時間だからシミュレーションルームに行くと宣言し、リフレッシュルームを出て行つた。

「で、君達も行くのかね？」

「放つておいたら、いつまでも続くので」

犬塚が良い笑顔で返してくれた。どうやら今のチームが本当に好きらしい。完全に部下たちをまとめられている訳では無いけれど、良い隊長だ。

彼ならこの複雑な人間関係も何とか出来るだろう。応援の言葉とともに送り出そう。

「行つてこい。がんばれよ隊長」

「イエッサー」

三人は敬礼をして部屋を出て行つた。

さて、どっちが勝つかな？ 今度結果でも教えてもらおう。

今のお喋りが丁度良い息抜きになつたようだ。

執務室に戻つて、気合いを入れ直してデスクワークにあたる。

何とか本日の分の書類仕事を片付けて、模擬戦のデータを松平に送信する。

訓練や模擬戦のデータから新しいアイデアが沸くそうで、わざわざ国と菱田重工間で特別協定を結んで、データのやりとりが行われているのだ。

仕事が終わり、時計を見ると18時を過ぎていた。

お腹も空いてきたので私は執務室を出て食堂に向かっていた。すると、また廊下で田口軍曹に遭遇した。が、行ったり来たりしてその場をうろついている。何か様子がおかしい。

「田口軍曹、どうした？」

びくっと肩が震えてこちらに振り向いた。いつも以上に反応が大きかつたが、何よりもいつもと違ったのは背中に何かを隠すような動きをしたことだ。

しかもそれなりに大きな物らしく手は後ろに回したままだ。

「何を隠している？」

額に汗が滲んでいるのが目に見えるほど焦っている。

宮野大将の真似でカマをかけてみるか。

「恋をした女性へのプレゼントかな？」

田口軍曹の顔色が一瞬で紅潮すると、一転して青ざめた。忙しいやつだな。

分かりやすすぎて思わずくすっと笑つてしまつ。

「大佐殿はエスパーですか？」

私が宮野大将にした反応と全く同じだったので、吹き出してしまった。

「確かに私のガラでは無いですが、そこまで笑わなくとも……」

かなり落ち込んでいるようだ。がっくりと身体全体でうなだれてしまった。

しまつたな。今笑いで誤解を与えてしまつた。早くこの勘違いを払拭せねば。宮野大将とのカマかけについてのやりとりを簡単に説明する。

「なるほど。そんなことがあつたのですか。さすが空軍大将殿ですね」

どうやら誤解はとけたらしく。

ただ残念ながら、どうやら宮野大将の悪戯好きが私にも受け継がれ

ているようだ。ちらつと見えた手紙に相手の名前が書いてあったのだ。それを見てまた悪戯心がくすぐられてしまった。

いやー、悪戯好きだな私！

「相手はそつだな。食堂のおばちゃんの一人娘で名前は佳奈カナだつたか。夜の食堂にバイトで入つてきている子だよな？ 絶世の美女とは言えないが、綺麗な長い黒髪で、清楚な印象がある真面目な良い子だ。あの垢抜けて無い感じに惚れ込んだのか？」

また軍曹の顔が赤くなつた。反応がとても早くてわかりやすい。

「なぜ分かったのですか？ 今のもカマかけというやつですか？」思わずひるんてしまふほど声が大きかつた。少し静かにと伝えるとシコソとしてしまつたので、ネタばらしをする。

「いや、今のは違う。その手紙の宛名が見えたのでな。というか、プレゼントに花束と手紙とは。いや、メッセージカードというのかな。なかなか良い趣味をしているではないか」

田口軍曹がクワツと顔をこちらに向けて、大きく口を見開いてこちらをジツと見つめてくる。困つた……正直顔が近い。しかも体格が良いのですごい迫力だ。

「あー……素敵な贈り物だと思うぞ？ 君のような者が贈るというのもギャップがあつて良いと思つ」

軍曹がこちらの手をとつて握つてきた。ゴシゴシした男らしい手だ。指の皮は堅く、マメのようなタコが何個か出来ている。数年に渡る訓練の積み重ねの結果だろうか。何故か私は手の分析をしている。その理由は、この光景が周りから見ると相当不思議な光景に見えてしまうと思つたからだろう。

体格の大きな男性がバラの花束を持ちながら、普通の体格をしいる男性の手を取つていて、その両者の距離がとても近い。見られたら何か酷い勘違いされそうだ。

「ほ……本当にそう思われますか？！ 花束とメッセージカードで喜ばれますか？！」

とても興奮した声だ。緊張のあまり声が震えているし、とても大き

くなっている。どうやって彼を落ちつかせよ。何か近い話題をふつて気を散らしてみるか。

「ところでだ軍曹。どうしてまたプレゼントを？」

私の疑問で手を離して、身体の距離もあけてくれた。どうやら周りの誤解を受ける危険からは助かったようだ。

「実は、今日が誕生日だと聞いているのでお祝いを。と思いましてなるほど。意外とがんばっているじゃないか軍曹。しかし、この緊張ぶりでちゃんと渡せるのか？」

「なるほど。それはまた素晴らしい話だ。君の恋が成就することを祈っているよ」

何とかその場から逃げだそうとするが、軍曹に呼び止められる。

「大佐殿、折り入つて頼みがあります」

何かいやな予感がするなあ……。

「プレゼントを渡すときに、その……人払いをして欲しいのですが

……」

消え入りそうな声で頼んできた。予想は出来ていたが、意外とこういうところでは気が弱いようだ。鬼軍曹の意外な一面を見た気がする。

軍曹には日頃新人の教育で世話をなっているので、協力は喜んで乗つてあげるとしよう。今日の模擬戦で正規パイロットに勝てるような新人を育成してくれたボーナスだ。

「人払いか。どうせならそうだな。彼女を呼び出して、一人きりにさせようか？」

軍曹に彼女と一人きりになれるチャンスを作る提案をする。

「大佐殿……あなたが私達の上官で本当に、本当に良かつた！ 私はなんと幸せな男なのでしょうか！」

……あのお田口さん、涙が流れているように見えるのは気のせいでしょうか？ そこまで緊張していたんですか。そんなあなたに協力出来て私はとても嬉しいです。予想外の展開に私の思考が少しおかしくなりそうだ。

何故か声まで出にべくなつてゐる氣がする。

「と……とりあえず、行こうか軍曹」

精一杯の笑顔を作つて食堂に向かいつづ促す。

「了解です。大佐殿」

花束片手に敬礼といふのも不思議な光景だ。

軍曹の名誉のために周りに人がいなくて本当に良かった。

とりあえず、急遽作戦を考えることになり、歩きながら作戦概要を軍曹に伝えていった。

「では軍曹。作戦「アード・ドリーム・シアター開始だ」

少し外連味が聞いた名前をつけて軍曹の恥ずかしさを「まかすのと、やる氣を引き出す。

大層な名前をつけているが実際大した作戦ではない。

佐官は食事を部屋まで運んでもらえるサービスがあるのだが、そのサービスをおばちゃんの娘である佳奈に頼むのだ。

ただ、今から頼んでもすぐ仕事に戻つてしまつので、それではあまり意味がない。仕事が終わるか終わらないかのギリギリの時間に配達するようにお願いし、配達が終わつたら仕事を上がるようにおばちゃんから言つてもらつ算段だ。

これならゆつくりと軍曹が彼女と話す時間が設けられる。

まあ、うまくやれば食事くらいには一緒にいけるんじゃないかな？確かに8時半頃に食堂が閉まるので、その時間から食堂のスタッフは食事をとるはずだから望みはあるだろう。

さつきの拳動不審つぶりを考慮すると多分起こりえないイベントなんだろうと思つてしまふのが残念な話だ。

ちなみに、この作戦の最大の問題は何かといつと……

私の夕食がとても遅くなると言つことだ。

しかし、これも軍曹のため、空腹の1時間や2時間くらいは我慢しよう。

そういえば、執務室の机の中にチョコレートぐらい入つていたと思うからそれを食べてしのぐか。

そんな風に自分の空腹をしのぐためにどうすれば良いか考えていたら、軍曹がいつたん花束を置きに部屋に戻った。そういえば、この作戦では彼も空腹に耐えるのだ。ただ、緊張で食事どころでは無いようなので大丈夫だろ？。

さてと、まずは敵情視察か。マップスをはじめとする兵器による戦争でも、恋愛という名の戦争でも、まずは彼我の情報収集が第一だ。確か意外と人気があつたような気がするが、さて、どうなることやら？

食堂につくと、さすが夕食時とあって大変混雑していた。

佐官用の特別ルートを使って（ただ単にスタッフ用の入り口なのが）中に入り込み、おばちゃんに声をかけた。

「おーい、おばちゃん。ちょっとこっち来て」

後ろから声がかけられて食堂のおばちゃんが振り返つてこちらを確認する。

そして、手を振りながらこっちにやってきた。

「あれま？ もっちゃん何でそんなところから来てるの？」

「いや、すごい混雑ぶりだね。仕事が忙しくてね。ちょっとと気分転換がてら配達サービスを頼みに来たのだが、真面目に列に並ぶと恐ろしく時間がかかりそうだったので。つい裏から

我ながらヒドイ言い訳だ。

ただ、さすがおばちゃん。特にこまれずに了承してくれた。

「電話で良いじゃないかい？ まあいいわ。大体何時くらいだい？」  
よし、これで第一段階クリア。

「そうだな。8時半あたりで頼めるか？」

「またギリギリだねえ……まあ、もっちゃんの頼みなら仕方ないわね」

そして次がまた難関だ。最大限の演技をしなくてはならない。

「ありがとう。助かるよ、おばちゃん。って、おっとしました。もう一つ頼みがあるのだが、配達の方は佳奈さんに頼めるかな？ 確

か今日は彼女の誕生日と聞いたのでな。普段多くの隊員が世話をなつておるお礼として、ちょっとした贈り物があつたのだが、忘れてきてしまった

「さすが、もつちゃん良い所あるわねえ。分かった。その時間に佳奈をそつちに送るわ。プレゼントのことは内緒にしておいてあげる。それと、これは私の誕生日も期待していいのかしら？ ちなみに私は来月の4月2日よ」

おばちゃんが嬉しそうに了解してくれた。何とか第一段階もクリアした。

ただ、どうやら来月の出費がこれで確定したらしい。さすがおばちゃんやるな！

さて、後はどれだけ彼女が人気を探るだけだが、スタッフ専用休息室の机の上を見ると結構な数のプレゼントが置いてあった。箱の数からすると、プレゼントの数は15程度か。

包装で包まれていて中身はよく分からないが、大きさからするとここまで大きくては無い。女の子に受けける小物とかアクセサリーとかそういうこう類いの物だろうか？

田口軍曹が用意しているような花束と手紙は……どうやらないようだな。

良かつたな田口軍曹。君のそのチョイスはやはり間違つていなかつたかも知れない。

敵情視察も出来たのでおばちゃんにもう一度礼を言つてから食堂を出た。

「さて、私もでまかせとはいへプレゼントを贈ると言つてしまつたな。何を贈るうか」

歩きながら何が良いかを考える。少なくとも軍曹のプレゼントのインパクトを潰してはならないし、彼をアシスト出来るような物が良いだろう。

娘の佳奈の事は実はあまりよく知らないのだが、おばちゃんは酒飲みだと聞いたことがある。惚氣話で旦那と良く飲み比べをしたと語

つていたことがあった。

なら、娘の方もある程度は飲めるだろう。メンデル遺伝の法則から考えると両親ともにお酒が飲める体质であるならば、子供は最低でも75%の確率でアルコールの代謝が出来る。

そう考えると、ワインならば家族で楽しめるし、うまいければ田口軍曹も誘われるかもしれない。我ながらなかなか良い選択だ。

「よし。ちょっと、ワインでも買ってくるか」

田口軍曹に8時30分くらいに執務室から食堂の間の廊下で待機するよう伝えて、車でワインを買いに急いで町へ向かった。

ただ、店について気付いた事だが、私はあまりワインに詳しくなかった。

しまった。この私としたことが……。

どういった物が良いのか悩んでいても仕方ないので、ダメ元でソムリエに誕生日に家族で楽しめるワインは無いか?注文したら、あつという間にワインを選んで出してくれた。意外と言つてみる物だ。ワインを買って基地に戻ると時間は既に8時をまわっていて、私もいつ佳奈さん來ても良いように部屋で仕事をしている振りをしながら待機を始める。

さて、田口軍曹は気が氣じや無いだろうなあ。様子を見てみたいが離れる訳にはいかないので、想像して一ニヤニヤすることくらいしか出来ない。

そして、約束の時間がやつてくる。

部屋の扉をノックする音が聞こえた。

「坂本さん夕食をお持ちしました」

確かに佳奈さんの声のようだ。

「どうぞ、入ってくれ」

「失礼します」

軽く頭を下げて佳奈さんが部屋に入つてくる。

食堂での仕事なので三角巾を頭につけてエプロンもしている。

後ろから見える長い綺麗な黒髪のお下げが白い布に染えてより黒く

綺麗に見える。

なるほど、清楚なイメージの子にこの衣装はなかなか似合つものだ。何といふか空気が柔らかく感じる。田口軍曹もこれにやられたのだろうか？

「ありがとう。セイの机に置いておいてくれ」

「分かりました」

端末や書類の載つていらない客用の机の上に食事を置いてもらひ。一通り置いてもらつたらおばちゃんへの直言通りプレゼントを渡さなければ。

「佳奈君。君のおかげで隊員達の士氣は非常に高く保たれてる。これは私からのほんの気持ちだ。是非お母様と一緒に楽しんで欲しい。誕生日おめでと」

ほんの少しの笑顔で、出来るだけ真面目な顔で手渡す。笑顔を見せるのは次の田口軍曹の仕事だ。

「ありがとうございます！ 私もお母さんもワインは好きなので嬉しいです」

ふう、とつあえずは及第点のよつだ。さて、舞台は整えたぞ田口軍曹。

後は君が主役だ。

佳奈さんが部屋から出て行くを見送つて行動に移る。

さて、では尾行開始だ。自分で言うのも何なのだが趣味が悪い。宮野大将が聞いたら大爆笑されそうだ。

いつも後ろをついていくと田口軍曹が花束を持って現れた。

「ハ、ハハ、こんばんは！ 佳奈さん」

あちゃー……緊張しそぎて舌が回つてないぞ軍曹。

「こんばんは、田口さん。そういえば今夜は食堂に来なかつたですね。身体の調子でも悪いんですか？」

おお、ちゃんと名前を覚えてもらつていいし、食堂に来ているかどうかまでチェックしてもらつていい上、身体の心配までしてくれている。なかなか良い子じゃないか。しかも脈もありそうだ。

「え、ええ。実は候補生達の仕事が残つていまして、食事はまだなのですよ」

田口軍曹は早口で言い切つてから大きく息を吸い込んだ。  
どうやら決意を決めて、ここで渡すつもりのようだ。

「あの佳奈さん。誕生日おめでとうございます。つまらないものかもしれませんが、これをどうぞ」

おっと……満面の笑みじゃ無くとも固まっている顔だ……。

ただ、その顔と花束のギャップが面白かったのか佳奈はクスクスと笑い始めた。笑い方も意外と上品だな。おばちゃんの娘とは思えない。……これはおばちゃんに失礼か。

「何というか済みません。やつぱり変ですね。この私が花束って軍曹が見るからにしょんぼりしている。あきらめるな軍曹！」

「いえ、今年もらつたプレゼントの中では一番嬉しいかな？ 小物やアクセサリーも嫌いじゃ無いんですけど、お花が大好きなんですよ。お部屋に飾りますね」

「おお……おおおおおお！ よかつたな軍曹！」

気付いたら拳を握つてガツツポーズをとつていた。落ち着け私よ。

「確か、お食事はまだなんですね？ みんなと一緒にで良ければ今から食事はいかがですか？ ワインもありますし」

田口軍曹が眼をぱちくりさせていた。何が起きているか多分脳が処理しきれていない状態だ。

「えつと？ 私と佳奈さんが食事ですか？」

「はい。あ、まだお仕事が残つてますか？」

「いえ、大丈夫です。是非こ一緒にさせてください！」

やたら大きな声で良い返事をした。おめでとう軍曹！

心の中で拍手を送つていたら、軍曹がこちらに気付いたようで頭を軽く下げるだけだった。

む、尾行がバレてしまった。こんだけ上手く行つたんだ。感謝されど文句は言われないだろ？

この時はまだ佳奈さんの「みんな」という言葉の意味が「両親のこ

とだと私は思つてゐた。

無事に作戦が成功したと思い、私も執務室に戻り遅い夕食をとることにした。

机の上の料理を見ると、どうやら焼き魚定食のようだ。若い連中にはあまり人気が無いのか少し余りやすいようで、最後に頼むと大体これになつてゐる。焼き魚も美味しいと思うのだが。

今日は時間が遅く、お腹が空いていることもあり、いつも以上においしく感じられる。空腹だけでなく、田口軍曹の幸福っぷりを分けてもらえたのが良い調味料だつたのではないだろうか。

食事が済んだので食堂に食器を返すついでに軽く様子を見てくるとしようと考えた。

しかし、食堂には私の想像していた楽しそうな光景とは全く別の楽しい光景がひろがつていた。

「何だこの人数は？」

そう、田口軍曹が佳奈さんとおばちゃんやショーフのおつさんと仲良くやつてゐるかと思いきや、物凄い人数が食堂に集まつてゐる。目測ざつと30人。一体何があつたと言うのだ？ 食器を返却口にあるシンクに置いて、近くの人に声をかけた。

「おい、君。これは何の騒ぎだ？」

「お？ なんだ？ つて坂本大佐！？」 失礼しました。大佐もおばちゃんに呼ばれて來たのですか？」

一体何の話だ？ あらゆる想定が頭の中で浮かんでは消え浮かんでは消えた。私が考え込んでいたと逆に不思議そうな顔をしてきた。

「あれ？ 坂本大佐も佳奈さんの誕生日祝いに来いと言わされたのでは？」

背中に冷や汗を感じる……しまつた。そういうことか。

作戦のためとは言え、仕事で忙しいと伝えたからこの情報は手に入らなかつたのか。

「実は先程まで仕事をしてゐたのでな。なるほど、實にめでたい話だ」

「おつかれさまです坂本大佐。このまま」一緒にいかがですか？」  
「いや、少し疲れているのでな。失礼させていただくよ」

「まずいな。私の作戦ミスだ。田口軍曹に謝らなければ」

人混みの中から田口軍曹を探すために周りを回つてみると、田口軍曹のトレードマークであるショートモヒカンが発見された。

肩をトントンと軽く叩き、こちらに気付かせて耳打ちをした。

「すまないな。私の作戦ミスだ。まさかこんなことになるとは想定していなかつた」

私の謝罪に対して田口軍曹は首を横に振つてくれた。

「いえ、どうかお気になさらないで下さい。当初の目的は達成出来ましたし、ここに着くまでの間は実に夢のようでした。作戦名通りのドリーム・シアターです。これで大佐殿を非難してしまつては、何か罰か当たりそうですよ」

田口軍曹は満面の笑みで答えてくれた。びつやう、本当に満足しているらしい。

辺りをもう一度見渡す。佳奈さんの近くにいる男達は口々に口説き文句を言つているようだ。それに対して佳奈さんは「口一戸」と当たり障りの無いお礼で返している。

私は再度軍曹に視線を戻し肩に手を出した。

「田口軍曹。君の戦場は数多くの強敵が待ちかまえてるよつだ。負けるなよ」

「了解しました。私は誰にも負けません」

それで良い。がんばれ田口軍曹。今日はとりあえず、みんなで楽しんで来いと伝えて食堂を後にした。

一応今夜は多忙という設定なのだ。作戦がバレてしまつては田口軍曹に甚大な被害が出る。

参加出来ないのは残念だが、彼の名誉のためだ。仕方ないだろ？

佐官用の個室に戻る中、作戦終了の合図を自分のために出す。

「作戦コード・ドリーム・シアター。ミッショングンプリート」

それが何だかおかしくて、にやついた顔で頭をかきながら帰つてい

た。部屋につくまで誰ともすれ違わなくて本当に良かつたと思つ。この時は、にやけた顔をいつもの真面目な顔にするのが、簡単に出 来そうになかったのだ。

個室に戻つて時計を確認すると既に9時を過ぎていた。

少し遅いと思ったが、とある人物にテレビ電話をかける。

数秒の呼び出しの後に着信が取られたようだ。柔らかく澄んだ声が 聞こえる。

「龍ちゃん、今日も1日おつかさま。晩御飯はしつかり食べた?」  
ショートカットの黒い髪で、毛先が少し跳ねている。にこやかな顔 の女性がモニターに現れる。

パイロット時代にオペレーターとして共に戦つた戦友であり、今は 大切な恋人。

ゴースト部隊が解散する際に、バラバラに別れるのなら、気持ちを 伝えておこうと決意し、告白したら上手くいつてしまつた。その話 はまた今度だ。

1日の終わりに、この声が聞こえて、顔が見られただけでホッと出 来る。

これが理由で、他人にあまり強く注意が出来なかつた。

「ああ、大丈夫。君も変わりないか?」

「うん、元気だよ。さつきまで仕事してたの? 何か声が堅いよ?」

彼女は耳が良いからか、小さい頃から声の調子や音にとても敏感だ そうだ。

その特性を活かして、今では諜報部の情報解析班についている。

その彼女から声の調子から相手の感情を読み取れる技術を学んだおかげで、彼女にはまだ遠く及ばないが、私にも少し真似が出来るよ うにはなつた。

「さつきまで、とある作戦指揮をとつていたからな」

真面目な顔をしながら答えた。そうとても大事な作戦には違いない。

「へー、でも何か随分楽しそうな作戦だつたみたいだね。どんなこ

としたの？」

さすがだ。顔は真面田でも、やはり声で面白ことじだつたと分かるか。

先程起こつた田口軍曹の一連の話を伝える。

花束とメッセージカードを持つてウロウロしていたこと、その緊張ぶり、協力を申し出たら涙を流したこと、うまくいったと思つたら落とし穴があつたこと。

それに丁寧に「うん」「おー」「それでそれで?」と相槌を打つてくれる。話していくとても楽しい。

「とまあ、そんなことをしてたんだ」

「田口さんがんばつたね。まだ分からぬけど、脈はあるかもね。龍ちゃんもおつかれさま」

「ありがとう。君の方は今日どうだった?」

「えへへ、どうだと思う?」

ちょっと聲音は高め、抑揚もあり。ちょっとした笑いも含まれているとすると。

「どうやら良い一日だつたみたいだね?」

「うん、正解。特に大きな事故も事件もなくて、おいしいご飯も食べれて、今は龍ちゃんとお話しできてる。とても良い日だよ」

最後の一言に少し恥ずかしくなつて、ほほをかく。顔はきっと赤くなつているだろう。

「あはは、照れてるー」

テレビ電話が当たり前になつていて、じつじつ表情まで分かるので良かつたり悪かつたりだ。

とりとめの無い話をしながら時間が過ぎていく。

どちらかが一方的におしゃべりをすることは無く、楽しい言葉のキヤツチボールが続く。

楽しい時はお互いに適當な話のネタで小ちく盛り上がり、どちらかが悲しい時はただ聞いてあげて、困ったときはお互いに妥協策を考え、心が疲れたときは甘えあって、身体が疲れていたら互いの

健康を気遣つて早めに話を終える。

そんなバランスのとれた絶妙な「//ミーティング」。

今日は一人とも楽しい時だったので、長いおしゃべり続いた。気付いたら10時30分だ。

次の日に響いてはお互いのためにならない。名残惜しいがそろそろ切り時だ。

「そろそろ終わらうか。そうだ。来月くらいに仕事で首都のミヤトに仕事で行く機会があるかもしれないから、そのときに『』飯でも食べに行こう」

「やつたー。楽しみにしてるね。早めに口時を教えてね？ 予定が

んばってあけちゃうからさ」

「んじや、おやすみ。サナ」

「おやすみ龍ちゃん」

モニターと音声が切れた。仕事に私情を挟むのは良くないが、これは早く宮野大将に仕事をしてもらわなければな。

電話が終わった後は、風呂を沸かして、ゆっくりと一日の疲れをとつて、ベッドに飛び込んだ。

長い一日が今日も終わる。

## 断章「死の商人」

断章「死の商人」

某国某月某日某時刻。

地下アジトに潜伏している武装した数人の男達の下に、身なりの良いセールスマントがやつてきた。

潜伏しているアジトが謎の男にかぎつけられているのだ。男達はそれぞれ武器を取り、常に相手の動きを止められるよう警戒をする。

そんな中でセールスマントは後ろから自動小銃をつきつけられるが、余裕の笑みを浮かべている。

男達のリーダーであるヒゲをたくわえた中年の男がセールスマントの額に拳銃をつきつけ、殺氣を含んだ声で何の用かと問う。

セールスマントは一ツコリと笑いながらカバンの中から書類を手渡した。

「商売に来ました。これを買いませんか？ あなた達にとつては必要不可欠な物でしょう？」

書類を手に取った男性は驚きのあまり書類を手から落としてしまった。

罷かどうかを確認するために、声に殺氣を込め続ける。

「貴様正気か？ 目的はなんだ？」

「もちろん大真面目です。目的はあなた方と同じですよ。國のためです」

一点の動搖もない落ち着いた返事だった。

「対価に何を要求する？ 金は無いぞ」

「書類の続きをご覧ください」

地面に落ちた書類を部下が拾い上げて手渡そうとするが、リーダーの男と同じように文面を見て、驚きのあまり固まってしまった。

リーダーの男はその手から書類をとり、続きを読むいく。

「こんなのが対価で良いのか？ ある程度は既に予定していたことなのだが」

セールスマンの男は両手を挙げて大げさに驚いた振りをした。

「おお、それはありがたい。では交渉成立ということでしょうか？」

「大丈夫だ。もう一つの条件も我々のスポンサーがどうにかしてくれる」

セールスマンの方が笑顔で握手を求めた。

2人の男が握手をして、交渉が成立する。

セールスマンは交渉が終わり、帰り支度を始めた。

男達に前と後ろから挟まれながら地下アジトの出口に向かう。そして、出口の扉を開ける瞬間に身体の向きを変えて、男達に非常に楽しそうな声で贈り物があることを伝えた。

「今日はお近づきのしるしに手土産を用意いたしました。どうかお使いください」

扉を開けると目の前に装甲車が五台用意されていた。

旧世代兵器とは言え、自動小銃と一般車両の組み合せより遥かに良い。

唖然とする男達に品の良い一礼をしてセールスマンの男は去つていった。

装甲車に歓喜し騒いだため、セールスマンが小型のマイクを使って呴いた言葉を男達は知る由もない。

「本部へ作戦完了。これより帰投する」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4762z/>

---

鋼鉄の指揮官（ハガネノシキカン）

2011年12月16日20時58分発行